

世界の偉人とも稱せらるゝものは、その人固有の特色あり、従つて亦その危険の方面に於ても絶大なる感化を後世に與へざるにあらずと雖も、こは畢竟非凡の人にして始めて堪へ得る所のもの、到底尋常人の模し得可きとにあらざる。然るに孔子は始めより何等の他奇なく、循々として息まず、卒にその人格圓滿に發達し、而もその瑕瑾の些少なる強いてを索ひるも、殆ど瑕疵の見えざる點に造りたるは、現實世界に於いて殆どその類を見ざる所にあらずや。

然り孔子は尋常より鍛鍊に修養して、非常の靈域に達せし、靈的人格の大聖人なりし也。蓋し孔子の人格は單純ならずして、複雑也。精神現象の總ての方面に於いて能く發達し、表はれては、其の行爲となり、舉動となり、はては其の飲食衣冠の末までも、能く其の人格を顯はし、吾人が心理的現象たる知情意三方面の何れにも偏せず、皆殆ど完全の域に造れるを見る。吾人は以下に之を諸種の方面より觀察して、その風采の一斑を窺はんとす。

飲食衣冠

一。滴の海水も尙能く海水の鹹味を嘗むるを得む。飲食衣冠の微も亦孔子

の人格の一斑を覗ふに足らずや。

昔人謂ふ、口は禍の門と。然り病は口より起るもの也。是の故に古來より世に爲すあらんとするものは、大旨攝生、養性に注意せざるものなし。孔子も亦此の點に關しては大に注意を拂ひぬ。論語に曰く、食精を厭はず、膾細を厭はず、食饘をえて、鰾魚、餒れ肉敗れば食はず、色惡れば食はず、臭惡ければ食はず、飪ことを失へば食はず。時ならざれば食はずと。郷黨又曰く、沽ふ酒、沽ふ脯は食はずと。郷黨又曰く、多食せずと。郷黨その多食せずと云ひ、不潔なるを食はずと云ひ、食膾、精細を厭はざるが如き、以て孔子は如何に攝生に注意せるかを見るべし。

孔子は單に飲食の攝生に注意したるのみならず、尙その割肉の方法までも能く意を注げり。論語に曰く、割正しからざれば食はず。其の醬を得ざれば食はずと。郷黨是れ以て孔子が如何に飲食の微に至るまで精細なる注意を拂ひて、中正を尙びたるかを見るべきにあらずや。

然れども孔子は道學先生の如く、爾く窮屈なるものにあらず。即ち單に攝生に注意したるのみならず、更に養性の點に意を留め、之を以て快樂を得るの具



とも爲しき。論語に曰く、肉多しと雖も、食氣に勝たしめず。惟酒は量なし、亂に及ばず。郷黨是れ一は攝生に注意し、一は養性に注意して、快樂を助くるの具としたり。ものにあらずや。是に於いて、吾人は孔子が酒量の大なりしと同時に、亦その酒癖なかりしを知る。論語に又曰く、蓋を撤せずして食ふと。郷黨是れ又食は管に攝生的なるのみならず、その快樂の一具とせりし言にあらずや。

孔子の衣服に對する注意は、飲食に對するが如く、亦精細なるが、要は儀容と實用との二點にあるが、若し儀容は専ら朝服に於いてして、以て其の趣味を表はし、實用は私服に於いてして、以て其の便利を主とせり。論語に曰く、君子紺青赤の色、緋赤色を以て飾しとせず。紅紫以て褻服と爲さずと。郷黨褻服とは私服の也。而してその私服に紅紫の色を用ひざるを見れば、その朝服に於いては一層の注意をなしたるは思ふべし。又曰く、暑に當つて、袷の締ほそぬの(給)あらぬの、必ず表はして之を出す。と。郷黨是は裏を著け、締給を外に表はし出して、體を見せしめざるを注意せるもの也。又曰く、褻裘長右袂を短くす。必ず寢衣あり。一身有半、狐貉の厚き以て居ると。郷黨蓋し長は其の溫を欲し、右袂を短とする

は、便なるを欲するもの、然れば、こは實用、便益を主とせるものに、あらずや。

容色動作

思中に在れば、色外に形はる。その敬虔の情、仁愛の心、如何ぞ外に形はれざるを得んや。而して孔子が容色動作の特色とすべきものは、公私その宜きを得たるに在り。公に於いては、嚴として、冰霜烈日の如く、私に於いては、洋洋たる春風の如し。論語に曰く、其の宗廟朝廷に在るや、便々と言ひ、唯だ謹むのみと。郷黨又曰く、朝に下大夫と言ふや、侃々如たり。上大夫と言ふや、誾々如たり。君在ませば、跼蹐如たり。與々如たりと。郷黨以てその恭敬と、諤々との状を見るべし。論語に又曰く、公門に入るや、鞠躬如たり。容れざるが如し、立つに門に中らず、行くに闕を履まず。位を過ぐるに色、勃如たり。蹶如たり。齊を擧げて堂に升る、鞠躬如たり。氣を屏けて息せざるものに似たり。出て、一等を降る、顔色を逞ち、怡怡如たり。階を沒り趨り進むや、翼如たり。其の位に復するや、跼蹐如たりと。郷黨又曰く、圭を執る、鞠躬如として勝へざるが如し。上は揖するが如く、下は授くるが如し。勃如として、戰色し、足、躅々として循ふことあるが如し。享禮には、容色あり、私覲に



は、愉々如たりと。郷黨その姿態の自然なる動作の禮に媚へる。一に恭敬の念より出でざるものなきを見るべし。

孔子は以上の如く、朝廷宗廟に於いて、禮を正して進退周旋せるのみならず、尙ほ途上に於ても、亦専ら禮を重んぜり。論語に曰く、凶服には之を式し、負版者國書を持つものには式すと。郷黨又曰く、車に升るに必ず正立して綏を執り、車中には内顧せず、疾言せず、親指せずと。郷黨以てその嚴然たる態度を見るべし。又論語に曰く、食するに語らず、寝ぬるに言はず、蔬食采羹瓜と雖も、祭には必ず齊如たりと。郷黨又曰く、席正しからざれば坐せずと。郷黨坐席飲食の微も尙ほ能く禮を重んじたるを見るべし。

蓋し孔子が宗廟朝廷に於ける坐作進退は、一に恭敬の心を體して周旋せるも、その郷黨に在るや然らず。和敬舒暢の風采、大に親しむべきものあるを見る。論語に曰く、孔子の郷黨に於けるや洵々如たり、言ふと能ざるに似たりと。郷黨朱子の註に曰く、郷黨は父兄宗族の在る所故に孔子之に居る其の容貌此の如しと。又論語に曰く、郷人と酒を飲み、杖者出づれば斯ち出づと。郷黨その謙讓に

いて人に誇らざる容色動作見るべきに、あらずや。論語に又曰く、黨人儻すれば朝服して阼階に立つと。郷黨抑も孔子は怪力亂神を語らざるの人。述而固より時俗の迷信に與みせざるや明なり。然れども尙ほ朝服して立つと云ふを見れば、敢然これを却けて時俗を驚かすが如き舉動なきは、是れ孔子の孔子たる所以の本色にして、蓋し其の性情の溫良なるより出でたるものなるか。孟子曰く、仲尼は已甚しきを爲さざる者と。離婁げに孟子は能く孔子の爲人を知悉せりと謂ふべき也。

孔子は朝廷に於ても、將た郷黨に於ても、動くに、一に禮を以てなしたれば、人或は其の行爲は總て禮と云ふ形式に泥み、絶えて綽々として餘裕なき學究的道學先生と思はんも、決して然るにあらず。是れその燕居閑暇の時に當りては、一層能くその聲容性格を形はせるを見て知るとを得べし。論語に曰く、寝ぬるに尸せず、居容ならずと。郷黨是れ一は寝ねても假臥死人の如き狀を爲さざるを云ひ、一は家居には儀容をこととせずして、和暢なりしを云へるものにあらずや。又論語に曰く、子の燕居するや申々如たり、天々如たりと。述而以てその閑



雅にして優遊自適従容として追らざるの態を云へるものにあらざるか。之を要するに孔子の態度風采や和敬の二者俱に宜しきに適へりと謂ふべし。

知的方面

學んで時に之を習ふ亦説ばしからずやと。學而是れ論語開卷第一章の語にして最も能く孔子が知的方面の性格を道破せる孔子それ自身の言にあらずや。蓋し孔子が知識欲に熾なるは殆ど其の先天性とも謂ふべくその抱負自信も亦甚だ鞏固なりし也。(好學參照)

論語に子曰く朝に道を聞かば夕に死なんも可也と。里仁鳴呼何ぞそれ意氣の壯烈なるや。實に孔子は此の如き氣魄を以て敢て下問を恥づることなく。孜孜々として學藝を勵み殆んど寢食をも忘るゝに至れり。况んや酒食の甘衣服の美を思ふの閑あらんや。論語に子曰く士道に志し惡衣惡食を恥づるものは未だ與に議るに足らざる也と。里仁その好學の念歲月と俱に長じ殆ど寢食を廢せるの狀想ふべきにあらずや。されば後年孔子謂ひけらく君子食飽を求

むるとなく居安を求むるとなく事に敏にして言を慎み有道に就いて焉れを正す學を好むと謂ふべきのみと。學而その言行一致を求め孜孜として實學是れ事とせる狀歷々として見るべし。

論語に又子曰く賢を見ては齊しからんとを思ひ不賢を見ては内自ら省みる也と。里仁その親切の語一たび之を聞かば誰れか精勵せざるを得ざらんや。是に於いて孔子その進學修徳の結果遂に次の如き經驗を得るに至りぬ。曰く之を知るものは之を好むものに如かず之を好むものは之を樂しむものに如かずと。雍也孔子既に此の經驗を得たりその進學の一日も息むべからざるを認むるや必ず痛切なるものありしならん。されば孔子は謂ひけらく譬へば山を爲ぐるが如し未だ一簣を成さずして止むは吾が止む也。譬へば地を平ぐるが如し簣を覆へすと雖も進むは吾が往く也と。子罕是れその進むも將た退くも皆對象にあらずして皆その己に存在するを云へるもの所謂仁を爲す己に在るの謂ひならずんばあらず。

孔子が進學の念の旺盛なる亦次の如く謂へるとあり曰く飽食すると終日



にして心を用ふる所なきは難い哉。博奕と云ふものあり之を爲す猶ほ己むに賢れりと陽貨言太だ奇矯に屬するも終日無爲にして安逸を貪らんよりも寧ろ博奕を爲して専心一意なるに如かざるを謂へるものにして偶以て孔子の如何に歲月を空費するを懼れ寸陰是れ惜める状を見るべき言にあらざるさればこそ晩年に至り門人の孔子が博學にして多能なるを見て或はその生知なるを疑ふものあるに至りしなれ然れども孔子は之を否定して我れ生れながらに之を知るものにあらず古を好み敏にして之を求むるもの也と述而云ひ自己は何等先天の知識なく循々然として近きより遠きに至れるを明にせりされば孔子は更に一步を進めて次の如く云ひぬ曰く我を知るとなきか子貢曰く何ぞ其れ子を知るとなしたんや子曰く天を怨みず人をも尤めず下學して上達す我を知るものは其れ天かと憲問是に至つて孔子は自らその知的方面の發達に於いて稍その頂點に達せるを暗示せるにあらずや蓋し孔子は晩年に至つて圖らずも易を學ぶに及んでその知的方面は全く完全なる發達を遂ぐるに至れり意ふに孔子は夫の隱者との接觸以前に於い

ては政治に東奔西走せりし時代なればその學術も主として現實的社會的にして哲學的思索の如きは偶弟子の之を問ふものあるも寧ろ之を避け居たる形迹なきにあらず論語に曰く季路鬼神に事ふるとを問ふ子曰く未だ人に事ふると能はず焉能く鬼神に事へんと敢て死を問ふ曰く未だ生を知らず焉ぞ生を知らんと先進又論語に子貢曰く夫子の文章は得て聞くべし夫子の性と天道とを言ふとは得て聞くべからざる也と公冶長然るにその晩年に至つて進々乎として現象界に拘泥し現實的學術にのみ踟躕するはその老いて盛なる知識欲を満足せしむるに足らざるものありしにや爰に端なくも易理を研究するに至りその愛好の極章編三たび絶つに至れり是に至つて孔子の知的方面は其の完全圓滿なる發達を爲しぬ論語に子曰く賜や女子を以て多學にして之を識るものと爲すか對へて曰く然り非か曰く非也予は一以て之を貫くと衛靈公嗚呼此の一貫の言こそ是れ眞に孔子が知的方面の最高思潮なれ

情的方面



凡そ人、知的方面に大發展を爲すものは、往々情的方面に缺如するものなきに、ならず所謂利害を打算するとのみ長ずるものは、血なき涙なき冷酷漢に陥るは、とかく人の免れざる所也。然るに獨り孔子に至つては、然らず、一方に於いては知的方面に大發展を爲せると同時に、又情的方面にも大なる發展を爲せり。否、孔子は或る場合には、反つて餘りに神經質にあらずやと思はるゝ節なきにあらず。論語に曰く、盛饌あれば必ず色を變じて、作つ。迅雷風烈必ず變ずと。(郷黨)その或は盛宴に列し、或は迅雷に遇ふが如き些細なる事に於いてすら、孔子は尙ほ色を變ずると云ふを見れば、その神經過敏の人なりしやを知るべし。然らば則ち孔子は此の神經過敏なる感情を如何なる點まで發達せしめしか。退いて意ふに、世の絶大なる感化を後世に與へしものは、皆偉大なる仁愛の心に富まざるは、莫し。釋迦の慈悲に於ける、基督の愛に於ける、悉く然らざるは、なし。孔子も亦仁の一字を提撕して、之を其の學の中心核軸と爲す。その仁愛の情に富めるは、今更ら言ふを要せざる所なりと雖も、吾人は彼の神經質なる感情を如何なる點まで發達を遂げしかを、道德的感情、審美的感情、宗教的感情の

三方面に分ちて之を見むと欲す。

(一) 道德的感情

人は自ら動いて能く人を感動せしむ。吾人論語を讀んで、孔子が父に對し、子弟に對し、門人に對し、朋友に對し、世人に對し、將た禽獸に對して、その惻々の情禁ずると能はざるものあるを見て、如何に孔子が仁愛の心に富み、惻隱の情に厚かりしを思はずんば、あらざる也。

孔子襁褓の中にその父、叔梁紇を喪ひ、母顔氏の手に於いて、貧窶の間に成育せり。されば慈母の永逝するや、孔子の哀傷は尋常ならざるものあり。禮記に曰く、孔子既に祥す。五日にして琴を弾じて聲を成さず。十日にして笙歌を成すと。檀弓蓋し、祥とは三年の喪を終へて、その母を祭れるとを云ふ。既に時は三年の星霜を経たり、而も尙ほ聲を成さざるものあり。その哀傷の情の切なるを以て知るべきにあらずや。然りと雖も、父母の死を傷むは、人の至情也。是れ未だ孔子が道德的感情の明著なるものと爲すに足らず。然らば門人に對する愛情や、何如。



吾人は既に之を顔回に見たり(顔回参照)既に之を子路に見たり(子路参照)又既に之を冉伯牛にも見たり(冉牛参照)故に爰には復た之を贅せざるも、その顔回に對し、子路に對し、又冉伯牛に對する孔子の語を追懐する毎に、千載の下、尙ほ能く楚々として人を動かかし、轉た其の哀傷悲痛の情に勝へざらしむるものあるを覺えずんばあらざる也。

吾人は又既に孔子が子産の死を聞いて涕を垂れて悲しまれしを見ぬ(子産参照)その友誼の情に厚きは復た言ふを要せず。論語に曰く、朋友死して歸する所なし。曰く、我れに於いて殯すと(郷黨)蓋し歸する所なしとは、その親族の喪を主るものなきを言ひし也。是を於て孔子が如何に人情に厚かりしを見るべきにあらずや。

抑も孔子が怵惕惻隱の心に深き、一般の世人が不幸に對しても、その行動自ら至情より溢れ來りて、覺えず人を感動せしむるもの多々之れあり。論語に曰く、凶服には之を式すと(郷黨)是れその一般人の死を悲しみて、中心より之を敬せるもの也。又論語に曰く、齊衰者を見れば、狎ると雖も必ず變ず。冕者と瞽者

とを見れば、褻と雖も必ず貌を以てすと(郷黨)又曰く、子齊衰者と瞽者とを見れば、之を見て少と雖も必ず作ち之を過ぎて必ず趨ると(子罕)その齊衰者を見て或は作ち、或は變ずるものは、是れ愛敬を致せるものならずんば、あらず。又論語に曰く、子喪あるもの、側に食するや、未だ嘗て飽かざる也。子是の日に哭すれば、歌はずと(述而)是に至つて其の恭敬慈愛の念、層一層に深きものあるを覺えずんば、あらず。

孔子の仁を説くや、自ら差等なきと能はず。孟子の所謂吾が老を老として、以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として、以て人の幼に及ぼす(梁惠王)もの、是れ也。然れども孔子は其の仁人の情を濶大にして、其の徳禽獸に及べるものあり。論語に曰く、子釣して網せず。弋して宿を射ずと(述而)蓋し宿を射ずとは、射るも、宿鳥を射ずとの也。是に於いてか孔子が道德的感情や、實に天地を動かし、鬼神を泣かしむる最高圓滿の域に達せりと謂ふべきにあらずや。

禮は人の行をして謙讓ならしめ、謙讓の徳は人の人格をして崇高ならしむ。孔子は既に禮を好み、禮を樂しみ、又能く禮を行へるの人也。その人焉ぞ謙讓な



らざるを得んや、吾人は既に之を夫の隱者の鮮腴倨傲なる態度に對して、如何に小心翼翼たりしかを見ぬ。隱者の諷刺參照又之を夫の郷黨に於ける態度に於て見ぬ。容色動作參照論語に子曰く、文は吾れ猶ほ人の如きと莫からんや、躬君子を行ふとは吾れ未だ之を得るとあらずと、述而躬行實踐に汲々たる孔子にして未だ之を得るとあらずと云ふ。あゝその謙讓思ふべし。又論語に曰く、躬自ら厚うして薄く人に責むれば怨みに遠ざかると。衛靈公是の語此れ豈に人の謙讓を守るべきを教へしものにあらずや。又曰く、人知らずして慍らず亦君子ならずやと。學而入の之を知らざるも悠々天を樂しむ、その至情、是れ亦謙讓の徳の發現にあらずや。論語に子曰く、君子義以て質となし、禮以て之を行ひ、孫以て之を出し、信以て之を成す。君子なる哉と。衛靈公あゝ是れ宛然たる孔子、それ自身が恰好の小葉、吾人は自らその丰彩風姿が奕々として露現し來るを見る也。

去つて更に孔子が行事に就いて、その謙讓の徳を見んか。史記に曰く、定公十四年孔子年五十六、大司寇より相事を行攝す。喜色あり。門人曰く、聞く君子、禍至

るも懼れず、福至るも喜ばずと。孔子曰く、是の言あるかな。その貴を以て人に下るを樂しむと曰はずやと。世家以爲へらく、己今攝政の事を行ふに至る、その位を云へば最高也。今や其の最高の位に居て卑賤の人に謙遜するを得、豈に快事にあらずやと。こは是れ孔子が魯に於ける一傳説に過ぎざれども、偶以て孔子が如何に謙讓の徳に富み、而して又その道德的感情の偉大なる點まで發達せるを見るべき證左にあらずや。

(二) 審美的感情

人格をして崇高にして且つ圓滿ならしむるものは美的感情を發展せしむるより善きはなし。吾人論語を讀み、孔子が最も此の點に著眼せしその人と爲りに服せずんばあらざる也。然り孔子は趣味を解し、能く文學美術を咀嚼してその味を樂める人也。嘗て曰はずや、詩に興し、禮に立ち、樂に成ると。泰伯又曰く、道に志し、徳に據り、仁に據り、藝に遊ぶと。述而あゝ此の成樂遊藝の四字、是れ孔子が學問の特長にして、又最も良所とすべき所にあらずや。然り實に此の遊藝成樂の四字に於いて、孔子の學問は永久に生命あるもの也。枯灰ならず、拘々焉



たらず人をして綽々として餘裕あらしむる所以のものならずんばならず。蓋し孔子は詩に通じ、繪畫に明にして、殊に樂に長ぜるの人也。而してその詩に通ぜるは、子弟門人に之を薦めたるを見ても明なるが、彼の詩を編せるを見ても詩參照亦知ることを得べきか。猶ほ論語に、關雎は樂んで淫せず、哀んで傷まず（八佾）と曰へるは、是れ明に詩を品せるものにして、其の之に通ぜるは今更之を説明するを要せずと雖も、その繪畫に至つては、論語の傳ふる所甚だ少く、その之れあるは、論語の子曰く、繪事は素を後にすと（八佾）あるのみ。鄭玄之を解して曰く、繪は畫文なり。凡そ繪を畫くに、先づ彩を布いて、然る後に素を以て其の間を分ちて、其の文を成す。猶ほ美女倩盼の美質あるも、亦禮を須ちて成るが若きに喩ふと、集解その繪事は素を後にすとの語を以て見れば、孔子は多少繪畫にも明なりしを見るべし。何となれば是れ明に繪畫を評論し、鑑識し、品隲したる語なれば也。

然れども孔子が美的感情に於いて發達したるは、繪畫にあらずして音樂にあり。その之に對する趣味も亦前者にあらずして後者に存せし也（樂參照）

先づその之を樂めるとを睹んか。論語に曰く、子齊に在り、韶を聞き、三月肉の味を知らずして曰く、圖らざりき樂を爲すの斯に至らんとはと（述而）三月の長き食物の味を忘れて之を樂しみ、最後に之を賛歎して、音樂の快なる斯く太だしとは思はずと云ふに至つては、その愛好の情見るべきにあらずや。又論語に子曰く、師摯の始め、關雎の亂、洋洋乎として耳に盈てる哉と。泰伯是れ孔子が晩年に及んで嘗て樂を聞けるを追懷して、尙ほ耳に盈てるが如き感ありしを謂へるものにして、亦その趣味の深く、之を樂めるとの淺からざるを見るべし。淮南子に曰く、榮啓期一たび彈いて、孔子三日樂しむと。主術訓樂師榮啓期が樂を奏するや、孔子は三日の間も樂めるを傳へし説也。その之を好樂するとの深き復た吾人が縷説を待たざる也。

次にその之を品せるとを視むか。論語に曰く、子韶を謂つて美を盡くし、又善を盡くせり。武を謂つて美を盡くせるも、未だ善を盡くさざる也と（八佾）是れ韶と武との樂を批判せるもの也。又論語に曰く、子魯の大師樂に語つて曰く、樂其れ知るべき也。始め作るや、翕如たり、之を從つや、純如たり、儼如たり、釋如たり、以



て成ると、八佾是れ樂の始終を評論せるもの也。

三にその自ら之を奏せるとを觀むか。論語に曰く、孺悲孔子を見むと欲す。孔子辭するに疾を以てす。命を將ふるもの戸を出づ。瑟を取つて歌ひ之をして聞かしむ。陽貨是れ孔子が孺悲に面するを好まず、而も病めるにあらざるを以て、瑟を鼓して其の意を知らしめしもの也。論語に又曰く、子磬を衛に擊つ。蕢を荷ふもの、孔氏の門を過ぎるものあり。曰く、心ある哉。磬を打つとを。憲問是れ荷蕢者が音樂を聽き得るの人のして、又孔子の磬の音がその思ふ所を發するの妙ありしが爲めに、此の語を爲せる所以のもの也。

四にその之を自ら歌へるとを尋ねんか。論語に曰く、子人と歌つて善ければ、必ず之を反さしめ、而る後に之を和すと。述而蓋し和すとは、孔子も亦歌へるを謂ふ也。又曰く、瑟を取りて歌ふと。陽貨是れ先きに自ら奏せる條に引證せし語也。

孔子が樂を樂しみ、之を品し、之を奏し、之を歌ひて、門弟子と俱に講學せしかば、その門人中に於いても、大に之に達するものあるに至れり。論語に曰く、點、爾

は何如、瑟を鼓するを希む。鏗、爾たり、瑟を舍いて、作ち、對へて曰く、三子者の撰に異なる。子曰く、何をか傷まん、亦各其の志を言へる也。曰く、暮春には春服既に成らん。冠者五六人、童子六七人、浴に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らんと。夫子喟然として歎じて曰く、吾れ點に與みせんと。先進、曾點は曾參の父にして、此の風流あり、而して論語の記者は、曾點の瑟を置ける狀を描くと、此の如くに巧に形容せるを見れば、その瑟を鼓するの巧みなりしも、亦思はるゝに、あらずや。管に然るのみならず、その感化の及べることの大なる、子路の如く率直なる人も亦之を鼓することを習ひ、稍之に上達するに至れる也。論語に子曰く、由の瑟、奚ぞ丘の門に於いて爲さんや。と。門人子路を敬せず。子曰く、由や、堂に升り、未だ室に入らざる也。と。先進是れ孔子が其の未熟の樂を聞いて、子路を咎めたるものにして、一は子路が未熟ながらも、既に其の堂に升り、なかく、好く鼓けるを見るべく、一は孔子の如何に樂に堪能なりしかを見るべき也。

既に孔子は樂を聽くの耳あり、樂を見るの心あり、樂を鼓くの手あり、樂を歌ふの口あり。此の如くにして、審美的感情焉ぞ、大發展を遂げざらんや。



(三) 宗教的感情

孔子の人格は既に崇高にして且つ圓滿也最早その人の人格としては殆んど間然する所あるなし然りと雖も是れ元向上的の事若し悟後の修養たる向下的の一事を缺くあらんか吾人は聊か物足らぬ感なきを得ざる也幸ひなる哉孔子は此の點に於ても亦偉大なる發展をなしその瀟洒として物に滯滞拘々せざる超世脱俗の狀轉た敬虔の情に禁へざらしむるものあり是れ吾人が爰に宗教的感情と號してその發展を尋釋せんと欲する所以のもの也

由來孔子は合理的精神に富み元より怪力亂神を語らざるの人也(述而)故に孔子は樊遲が知を問へるに鬼神を敬して之を遠く知と謂ふべしと雍也對へたる程なれば孔子は全く宗教的信念を有せざるが如く人の之を思惟するあらんも決して然るものにあらずこは惟だ孔子が當時の迷信を信ぜざるまでにして宗教的信念を有せずと云ふにあらず唯だソクラテスの如く著しく當時の迷信に反對して奇禍を沾ふが如きとを爲さざりしのみ蓋し是れ孔子の孔子たる所以の特色して又一方より見れば孔子が傳説的多神教の信仰者

たるが如く見ゆる所以也論語に曰く子仲弓に謂つて曰く犁牛の子駢うして角あり用ふるとなからんと欲するも山川其れ諸れを捨てんやと(雍也)蓋し山川とは山川の神祇のとも是れ以て孔子が多神教的信念を有するを見るべし抑も孔子が禮と祭とを重んぜるは既に多神教を信ぜるものと謂ふべし然れども是れ孔子が信仰の窮竟のものにあらず意ふに初め多神教を信じその合理的思想の發展と與に遂にその窮竟的信念を懐くに至れるものなるか論語に子曰く禹は吾れ間然する所なし飲食を菲くして孝を鬼神に致すと(泰伯)是れ明に其の思想の多神教的なるを示せるものにあらずや

然るに孔子が合理的思想の發達するや傳説的多神教はその理性的信念を満足せしむると能はず遂に高大なる或る物を信ずるに至れるに似たり論語に曰く子病む子路禱らんとを請ふ子曰く諸れありや子路對へて曰く之れあり誅に曰く爾を上下の神祇に禱ると子曰く丘の禱ると久しと(述而)是に至つて孔子は陽に多神教を排斥せざるもとにかく暗々裏に之を否定して或る物を信ぜるを暗示せるものにあらずや



然らばその或る物とは何ぞや。論語に曰く、子病む、子路門人をして臣と爲さしむ。病ひ間にして曰く、久しい哉。由の詐を行ふや。臣なくして臣ありと爲す。吾れ誰れをか欺かん。天を欺かんやと。子罕是に於いて孔子はその或る物に對して明に天を以て對へたるを見るべし。又論語に曰く、罪を天に獲る禱る所なき也。と。八倍此の語元來消極的否定的の言なれども、孔子が或る物即ち天を禱れるものと見るべき反證の語にあらずや。

是に於てか吾人は孔子の窮竟的信念は既に天に在るとを見る。然らば天とは何ぞや。蓋し天とは嘗に蒼々たる有形的の天を謂ふのみにあらず。即ち人格的の實在にして古來之を上帝若しくは單に帝と云ひ天地萬有を主宰するものとさせるものは是れ也。

然らば孔子が寫象せる天とは如何。曰く、聰明なる叡知と剛健なる意力とを有する人格的實在是れ也。今その然る所以を尋ぬるに、吾人の先きに引證せる論語の吾れ誰れをか欺かん。天を欺かんやと。子罕の天とは既に天の叡知あるを豫想せるものと見る可きにあらずや。

論語に子曰く、我を知るゝと莫きかな。子貢曰く、何ぞ其れ子を知るとなしと爲さんや。子曰く、天を怨みず、人をも尤めず、下學して上達す。我を知るものは其れ天かと。憲問その我を知るもの天かとは是れ明に天の叡知あるを謂へるものにあらずや。

論語に又子曰く、天徳を子に生ず。桓魋其れ子を如何せんやと。述而又公羊傳に曰く、顔淵死す。子曰く、噫、天予を喪ぼせり。子路死す。子曰く、噫、天予を祝つと。哀公十四年是れ共に亦天に意志あるを明示せるものにあらずや。

蓋し孔子が斯る思想感情を有するに至れるは、無論晩年のとなれども、その端を求むれば五十歳前後にあるが若し。論語に曰く、五十にして天命を知ると。(爲政是れその明證にあらずや。かくて年と共に艱險を経るに従つて、その信念益堅きを致し、卒に牢乎として抜くべからざる此の絶大なる信念を有するに至れるものか。論語に子曰く、君子三畏あり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れざる也。大人に狎れ、聖人の言を侮ると。季氏又論語に子曰く、命を知らざれば以て君子と爲すとなし。禮を知らざれば以て



立つとなし言を知らざれば以て人を知るとなき也と(堯曰)意ふに孔子は既に其の聰明なる叡知と剛健なる意力とを有する實在を信ず之を吾人が有する意知に比ぶれば彼れの絶大にして此れの絶小なる殆んど比倫を絶し恰も蒼海一粟の感なきを得ず是れ孔子が屢天命を謂ひ而もその宿命を信ずるに至れる所以なるらんか

然るに孔子はかく天命の畏敬すべきを屢口にせるのみならず陳蔡死生存亡の際に在つても尚ほ泰然として動かず自若として懼れず命を天に委し綽々然として餘裕ありしものは何ぞや是れ他なし一に此の確乎として不拔なる信念より溢れ來りしものにあらずや否然るのみならず孔子の抱負の大なる自信の厚き殆ど其の最高潮に達せるものあり論語に子曰く大なる哉堯の君たるや巍々乎たるは唯だ天を大なりと爲す唯だ堯之に則り蕩々乎として民能く名くるとなしと(泰伯)是れ孔子が堯の天命を畏敬し厚く之に準ぜざるを歎美せるもの然るに孔子は更に一步を進めて次の若く謂ふに至れる也論語に子曰く予れ言ふことなからんと欲す子貢曰く子如し言はざれば小子何

をか述べん子曰く天何をか言はん四時行はれ百物生ず天何をか言はんやと(陽貨)是れ孔子が自ら天に則り自ら天に擬せるものにして即ち佛陀を以て自ら居り救世主を以て自ら任ぜるもの也是れ豈に孔子が宗教的感情の最高靈域に到達せるものにあらずや

意的方面

能く泣くものは多く作つと能はざるもの也孔子は大に泣き而も亦大に作てるの人なりし也即ち幼より老に至るまで終生不斷努力して息まざる進取的活動的人なりし也意志の一貫せる人なりし也所謂易の天行健君子自彊して息まらず(象)は眞に孔子が意的方面の恰好の形容辭ならずんばあらず吾人は聊か便宜の爲め立志敏行大勇の三に分ちて孔子が意的方面の發展を窺はんと欲す

(一) 志

志は事の本也業の初也志未だ樹たずして事と業との就れるを聞かず是の故に男兒の業を爲す一に立志より始まらざるもの未だ之あらざる也



抑も孔子の志を立つるや、十有五歳より始まる。論語に子曰く、吾れ十有五にして學に志すと爲政是れより以往七十有四歳に至る長き間、一日も息むとなく、孳々として學業を砥礪し、遂に夫の偉大なる人格を就せる也。而してその志を振起するや、曰く、憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず。一隅を擧げて三隅を以て反さうせざれば復けずと述而以爲らく憤悱して匪焉勉むる所なければ更に啓發する所なし。物の四隅あるもの、一を擧げて其の三隅を知るべく、而も三隅を以て之を證すると能はざるが如きは、復た再び之を告ぐるに足らざる也。と以て學の立志憤發に成るものなるを見るべきと同時に、如何に孔子が憤悱せしかを想ふべし。

孔子は實に此の憤悱啓發の念を以て終始自發的に將た自律的に自彊息まざるものなりし也。論語に曰く、葉公孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ曰はざるか。憤を發して食を忘れ、樂しみ以て憂を忘れ、老の將に至らんとする知らずと爾か云へと述而あゝ、その憤發忘食、樂以忘憂の語、又以て孔子の志氣の壯烈なるを見るべきにあらずや。而して此の言實に孔子が老年に至つて

發せるものなるを思へば、吾人は更に孔子の志の堅く、老いて益旺盛なるを想はずんばあらず。

蓋し是れ孔子が天行健を以て自ら大に感發するものあるより出てたるものなるか。論語に曰く、子川上に在りて曰く、逝くものは斯の如きかな。晝夜を捨てずと。子罕。夫れ孟子は最も能く孔子を知れる人也。而してこれが意を敷衍して次の如く謂ひぬ。曰く、徐子曰く、仲尼亟水を稱して曰く、水なる哉。水なる哉と。何をか水に取れりや。孟子曰く、原泉混々として晝夜を捨てず。科に盈ち、而る後に進みて四海に放る。本あるものは是の如し。是れ之を取れるのみ。苟も本なきものは、七八月の間、雨集りて、溝澮皆盈つるも、其の涸るゝや、立ちどころにして待つべき也。故に聲聞情に過ぐるは君子之を恥づと。離婁、その聲聞情に過ぐとは眞に是れ孔子の意を得たるものにして、又孔子が其の素養を怠らず常に言論よりも實行を重んじたるも、亦實に此に存ずるものならずんばあらず。

意志發動して、爰に(二)行行爲となる。吾人は既に孔子が立志の堅きを見ぬ。然らば



其の發現たる行爲や如何。

元來孔子は行に敏にして言に訥なるを尊べる實行的人也。故に言の行に伴はざるは孔子の恥ぢとせる所なりき。論語に子曰く君子其の言に恥ぢて其の行に過ぐと。憲問蓋し過ぐとは餘りあるを欲するの謂ひ也。又論語に子曰く古は言の出ださざるは躬の逮ばざるを恥づれば也と。里仁是れ言の難きにあらずして行の難きを云へるもの。又論語に曰く君子其の知らざる所に於いては蓋し闕如たり。名正しからざれば言順ならず。言順ならずれば事成らず。事成らざれば禮樂興らず。禮樂興らざれば刑罰中らず。刑罰中らざれば民手足を措く所なし。故に君子は之を名くるや必ず言ふべき也。之を言へば必ず行ふべき也。君子其の言に於て苟もする所なきのみと。子路是れ言行の一致を重んじ、殊に言の苟もすべきにあらざるを説けるもの也。されば孔子は言の依據すべき標準を説いて曰く君子九思あり。視は明を思ひ、聽は聰を思ひ、色は溫を思ひ、顔は恭を思ひ、言は忠を思ひ、事は敬を思ひ、疑は問を思ひ、忿は難を思ひ、得を見て義を思ふと。季氏又論語に子曰く群居終日にして言義に及ばず、好んで小慧を

行ふ難い哉と。衛靈公忠信正實是れ孔子が言の標的ならずんばあらず。論語に曰く子張行を問ふ子曰く言は忠信にして行は篤敬ならば蠻貊の邦と雖も行はれん。言忠信ならず行篤敬ならざれば州里と雖も行はれんや。立てば其の前に參するを見、輿に在れば衡に倚るを見、夫れ然る後に行はると。子張諸れを紳に書ると。衛靈公以て孔子が言の標準は忠信に在るを見るべし。孔子既に言の忠信正實なるを欲す。故に之に過ぐるは之を巧言令色として大に恥ぢ懼れ、且つ大に之を惡めるものなりき。論語に子曰く巧言令色鮮い哉。仁と學而而して此の言復た陽貨篇にも出てたり。又以て巧言令色の如何に之を恥ぢたりしを見るべし。論語に又子曰く巧言令色恭に足ぐるは左丘明之を恥ぢ、丘も亦之を恥づ。怨を匿くして其の人を友とするは左丘明之を恥ぢ、丘も亦之を恥づと。公冶長又論語に子曰く巧言は徳を亂る。小忍ばざれば大謀を亂ると。衛靈公以て其の之を恥ぢ、之を懼れたるを見るべし。又論語に子曰く紫を惡むは是れ朱を奪へば也。鄭聲を惡むは之れ雅樂を亂れば也。利口を惡むは之れ邦家を覆すものなれば也と。陽貨以て辭を巧にし、色を令くする不忠のもの



を惡みしかを思ふべし。  
 然るに世人徒に忠信の實なくして巧言以て世に干むるもの多く従つて又  
 言の易くして行の難きを見たる孔子は言に對しては消極的態度に出で、行  
 に對しては反つて積極的態度を取るに至りぬ。論語に子曰く君子は言に訥に  
 して行に敏なるを欲すと。里仁又論語に曰く子貢君子を問ふ子曰く先づ其の  
 言を行ひ而る後に之に従ふと。爲政之に従ふとは蓋し之を既行の後に言ふべ  
 きとを謂へる也。又論語に子曰く邦道あれば言を危うして行を危うす邦道な  
 ければ行を危うして言孫ふと。憲問是れ又行の積極的にして言の消極的なる  
 べきを謂へるもの也。

蓋し孔子が實行を重んじて言を慎めるは言の正鵠を得ざると行の之に伴  
 はざるを懼れて也。若しそれ言にして忠信行にして篤敬而して言行宜しく一  
 致するを得んか孔子焉ぞ之を否定するものならんや。否孔子は行にも敏に  
 して而も亦言にも敏なりし人その言ふべき時には大に之を言ふべきを主張  
 せるものなりき。論語に孔子曰く君子に侍して三愆あり言未だ之を行はずし  
 むるものなりき。論語に孔子曰く君子に侍して三愆あり言未だ之を行はずし

て言ふ之を躁と謂ふ言之に及んで言はず之を隱と謂ふ未だ顔色を見ずして  
 言ふ之を瞽と謂ふと。季氏又論語に子曰く與に言ふべくして之を言はざれば  
 人を失ふ。與に言ふべからずして之と言へば言を失ふ。知者は人を失はず亦言  
 を失はずと。衛靈公その隱と云ひ人を失ふと云ひ是れ皆言の發すべき時には  
 大に之を言ふべきを謂へるものにあらずや。故に孔子は更に次の如く云ふに  
 至りぬ。論語に子曰く徳あるものは必ず言あり言あるものは必ずしも徳あら  
 ずと。憲問是れ言行一致の至處に達せるものにあらずや。

(三) 勇

聖孫子思子曰く知仁勇三者は天下の達徳也と。中庸吾人は孔子が知と仁と  
 は既に其の知的方面と情的方面とに於いて見ぬ而もその大勇に至つては多  
 少瞥見する所ありしも未だ其の眞面目のある所を見ず是れ爰に孔子が大勇  
 の一斑を窺はんと欲する所以也。  
 蓋し孔子の勇は孟子の所謂浩然の氣にして深く道義に根ざせるもの、謂  
 ひ也。論語に子路曰く君子勇を尙ぶか子曰く君子義を以て上と爲す君子勇あ



りて義なければ亂を爲す小人勇ありて義なければ盜を爲すと陽貨以て小人  
 匹夫の勇を排して深く道義より溢れ來れるものを取れるを見るべし論語に  
 又曰く司馬牛君子を問ふ子曰く君子は憂へず懼れずと曰く憂へず懼れざる  
 斯ち君子と謂ふべきや子曰く内省みて疚しからず夫れ何をか憂へ何をか懼  
 れんやと顔淵その内省不疚の言又以て内自ら養ふ所あるを知るべし論語に  
 又子曰く知者は惑はず仁者は憂へず勇者は懼れずと子罕論語に又子曰く君  
 子の道は三我れ焉れを能くするとなし仁者は憂へず知者は惑はず勇者は懼  
 れずと子貢曰く夫子自ら道る也と憲問蓋し自道とは孔子が謙辭なりとのと  
 也子貢が贊せしが若く孔子は既に知仁勇の三達徳者なりし也是に於いてか  
 孔子は仁と勇との合一を説いて曰く徳あるものは必ず言あり言あるものは  
 必ずしも徳あらず仁者は必ず勇あり勇者は必ずしも仁あらずと憲問之を以  
 て夫の子路が血氣の勇を排せし言に合はせ考ふれば孔子の勇なるものは深  
 く道義に根ざせるものなりしかを見む  
 孔子は既に仁者の勇に達せる人也是に於いてか義の在る所には全力を捧

げて進まんとする獻身的の考を懐きぬ孟子に曰く昔者曾子子襄に謂つて曰  
 く子勇を好むか吾れ嘗て大勇を夫子に聞けり自ら反さうして縮からずんば  
 褐寛博と雖も吾れ焉れを懼れざらんや自ら反さうして縮ければ千萬人と雖  
 も吾れ往かんと公孫丑是れ論語に於ける孔子が義を見て爲さざるは勇なき  
 也と爲政の好註解にあらずや論語に子曰く仁に當つては師に譲らずと衛靈  
 公謙讓彼れが若き孔子にして既に此の言あるに至る又以て其の勇の益向上  
 せるかを見るべきにあらずや又論語に子曰く志士仁人生を求めて仁を害す  
 るとなし身を殺して仁を成すとありと衛靈公あゝ何ぞ其の言の壯烈なるや  
 仁の爲めに生を求めず死を避けず通身渾て是れ仁是に至つて吾人は孔子が  
 仁の化身にして徳の權化たるを認めざらんとするも得ざる也  
 孔子は既に徳の權化にして仁の化身たり然らばよし死生存亡の危急に際  
 するも焉ぞ疑惧する所あるべきものならんや實にや孔子は宋の桓魋が害に  
 遇へるも身は平然として而も其の言や實に雄壯偉大を極むるに至りぬ論語  
 に子曰く天徳を予に生ず桓魋其れ子を如何せんと述而是れ其の運命を天に



委して惧る所なきの勇や、洵に適然として群を抜けるものと謂ふべく、又自ら其の強大なる自任抱負を懐けるかを思ふべし。論語に曰く、子、匡に畏る。曰く、文、王既に没し、文、茲に在らざらんや、天の將に斯文を喪ぼさんとするや、後死者、斯文に與るとを得ず、天未だ斯文を喪ぼさず、匡人其れ予を如何せんと、子罕斯く孔子が死生の難關に際し、益、大勇を形はして、その絶大なる抱負を示せるに拘らず、その門人に至つては、驚愕措く所を知らざるものあり、史記に曰く、匡人孔子を拘ると益、急なり、弟子懼ると、世家是に於いて、吾人は孔子と門人との人格の相違を明に認めざるを得ざる也。孔子が匡人の難に於いて發せる、斯文とは猶ほ斯道と謂ふが如く、人類社會に於いて、古今を貫徹せる原理の謂ひ也。朱子此の文を解して曰く、天若し此の文を喪ぼさんと欲せば、必ずや我をして此の文に與ることを得しめざらん、今我既に此の文に與ることを得たり、是れ天の未だ此の文を喪ぼすことを欲せざる也、天既に此の文を喪ぼすことを欲せず、匡人其れ我を奈何せんやと、是に由つて吾人は孔子が辭色意氣の益、壯烈なるを見ると同時に、一方に於いては

既に孔子が天人合一の思想に到達せるを見る也。

超世脱俗

世に知情意の三方面能く調和して、略ぼ圓滿に發達せるものなきにあらずと雖も、多くは平凡なるを免れざるを常とす、然るに孔子に至つては、此の點に於いても亦、適に群を抜き、超然として、凡俗を脱せるものある也、論語に子曰く、蔬菜を飯ひ、水を飲み、脰を曲げて之を枕とす、樂亦其中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於いて、浮雲の如しと、述而その浮雲の懷や、真に睥然たる中和の象、見るべきにあらずや、又論語に子曰く、富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れ亦之を爲さん、如し求むべからずんば、吾が好む所に従はんと、述而富を求めず、名を求めず、その好む所に従つて、悠々自適せるさま、千載尙ほ生氣あるを覺ゆ。

蓋し孔子は、其の性行に於いて、大に偏狭固陋なるを避けし、人也、是れ其の中道中行を尊びたるを見ても知るべし、孔子の態度参照されば、論語の記者は、孔子が偏狭固陋を如何に避けたりしかを詳に叙して、次の如く謂ひぬ、論語に曰



く、子四を絶つ。意母く、必母く、固母く、我母しと。子罕母意とは私意なきの謂ひ、母必とは期必するとなき意母、固とは固陋偏狭ならざるの意母、我とは我見を懐かざるの意也。

孔子は既に四を絶てるの人也。その動容周旋、豈に安詳ならざるを得むや。論語に子貢が夫子は温良恭儉讓學而と評せるは、最も善く其の風采を道破せるもの也。又論語に曰く、子温にして厲威にして猛ならず、恭にして安と述而その恭而安なる語、その脾然たる中和の氣象、洵に言辭の間に見はるゝを覺ゆ。孟子曰く、君子の性とす、所仁義禮智心に根ざす、其の色に生ずるや、脾然として面に見はれ、背に盎れ、四體に施し、四體の言はずして、喩る、盡心と謂へるもの、移して孔子の温容を評せるものと謂ふべきか。

是に於いてか孔子自らも其の偏狭固陋の態なきを自覺して次の如く謂ひき。曰く、子顔淵に謂つて曰く、之を用ふれば行ひ、之を舍つれば藏くる。惟だ我と爾と是れあるかなと。述而更に孔子自ら之を説明して曰く、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えずと。爲政あゝ、従心所欲不踰矩と

は眞に是れ完全にして圓滿なる聖域にして、凡俗を脱すると更に數層なるものにあらずや。

之を要するに、孔子の性格は、智情意何れに於いても圓滿にして、偏狭ならず、浮華を避けて、而も枯槁ならず、淡然泊然たる中、自ら中和の氣形はれ、從容自在、優遊迫らざるに存せりと謂ふべし。是れ豈に萬古人間性格の典型たる可きものにあらずや。



## 一五 孔子の感化

根本張りて枝葉繁きを致し源泉深くして水流遠きを致す。孔子深く修養する所ありて、夫の偉大なる人格を就せり焉。感化の門人に及ぼすものなからざるを得むや。果然、孔子が直接門人に及ぼせる感化力に至りては、洵に吾人が驚歎に値するものあり。否、晉に然るのみならず、その洋々たる徳や、時は二千載の今に垂れ、地は日清韓の三國を光被し、今尙ほ東亞道德の中堅となる。於戲、亦富ならずや。

## 門人の孔子観

孔門の下、聚まるもの三千人、身六藝に通ずるもの七十有二人、皆是れ孔子の絶大なる人格に冶鑄せられざるは莫きの徒也。孟子曰く、力を以て人を服するものは心服するにあらず。力贖らざれば也。徳を以て人を服するものは中心悦んで誠に服す。七十子の孔子に服するが如き也。と。公孫丑げにや、子路の若き蠻的、人物も尙ほ孔子の如く、やさしくも瑟を鼓するに至り、皆全く其の風に薰陶

せられ、敢て獨立の思想を述ぶるものなきに至れるこそ、その感化力の偉大なるを見るべけれ。

大陽出で、衆星藏くる。衆星たりし門人焉。孔子を仰がざるを得むや。論語に曰く、顔淵喟然として歎じて曰く、之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅く、之を瞻て前に在りとすれば忽焉として後に在り。夫子循々然として善く人を誘ひ、我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷めんと欲して能はず。既に吾が才を竭し立つ所ありて、卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由し未きのみと。子罕以爲へらく、孔子を山に譬へて仰げば、愈高くして殆ど其の聳ゆる所を知らず。又之を物に譬へて鑽れば、愈堅くして殆ど其の斷つ所を知らず。前に在りと思へば、忽ち後に在り。その人格の崇高にして絶大なる、殆ど同等の端睨し得る所にあらずと。

あ、顔回は最も孔子に邇き人也。然るに此の人にして尙ほ此の言あり、况んや、冉求の徒焉。ぞ孔子の人格に模倣し得る所ならんや。論語に冉求曰く、子の道を説ばざるにあらず。力足らざれば也。子曰く、力足らざるものは中道にして廢



す今女は盡きれりと。雍也蓋し盡きるとは進むを欲せざるの謂ひ也。爲政の材ありと謂はれし。冉求にして尙ほ此の言あり。又以て孔子の人格の偉大なりしを想ふべし。

若し夫れ子貢に至つては孔子を讚すること一再にあらず其の語論語諸籍に見ゆ。曰く大宰子貢に問うて曰く夫子は聖者か何ぞ其れ多能なるや。子貢曰く固に天之を縦すに將ど聖として又多能ならしめし也と。子罕又論語に曰く衛の公孫朝子貢に問うて曰く仲尼焉くんか學ぶ。子貢曰く文武の道未だ地に墜ちず人に在り。賢者は其の大なるものを識し不賢者は其の小なるものを識す。文武の道あらざるとなし。夫子焉ぞ學ばざらん。而も亦何の師か之あらんやと。子張その子貢の如何に孔子を欽仰せしか見るべきにあらずや。

否たゞに然るのみならず子貢の之を仰ぐや實に顔淵以上にして殆ど其の頂點に達す。論語に曰く叔孫武叔大夫と朝に語つて曰く子貢は仲尼より賢れりと。子服景伯以て子貢に告ぐ。子貢曰く之を宮牆に譬ふるに賜の牆や肩に及び室家の好を窺ひ見るとを得。夫子の牆や數仞其の門を得て入らざれば宗廟

の美百官の富を見ず其の門を得るもの或は寡し。夫子が云ふ亦宜ならずやと。子張又論語に曰く叔孫武叔仲尼を毀る。子貢曰く以て爲すとなかれ。仲尼は毀るべからざる也。他人の賢者は丘陵也猶ほ踰ゆべき也。仲尼は日月也得て踰ゆるとなし。人自ら絶たんと欲すと雖も其れ何ぞ日月を傷けんや。多に其の量を知らざるを見る也と。子張子貢の孔子を辯護する至れりと謂ふべし。

論語に又曰く陳子禽子貢に謂つて曰く子恭を爲す。仲尼豈に子に賢らんやと。子貢曰く君子一言以て知と爲し一言以て不知と爲す。言慎まざるはあるべからず。夫子の及ぶべからざるや猶ほ天の階して升るべからざるが如し。夫子邦家を得ば所謂之を立つれば斯に立ち之を道けば斯に行き之を綏すれば斯に來り之を動かせば斯に和らぐ其の生けるや榮し其の死するや哀しむ之を如何して其れ及ぶべけんやと。子張その數仞の牆と云ひその日月無踰と云ひかの天の階升るべからずと云ひ是れ豈に其の崇仰の極に達せりと謂ふべきものにあらずや。

孔子晩年の高足曾子に至つては孔子を仰ぐこと殆ど神聖視する者あり。孟



子に曰く、子夏、子張、子游、有若の聖人に似たるを以て、孔子に事ふる所を以て之に事へんと欲し、曾子に疆ふ。曾子曰く、不可なり。江漢以て之を濯ひ、秋陽以て之を暴らし、皜々乎として尙ふべからざるのみと。滕文公是れ一は子夏、子張、子游の徒が如何に孔子が歿後、その津梁を喪ひて之を慕へるかを見るべく、又一は以て曾子が孔子の神聖の徳を害せられんとするを恐れしかを見るべし。

此の外尙ほ門人の孔子觀とも見るべき語。孟子に在り曰く、宰我、子貢、有若は智以て聖人を知るに足り、汗その好む所に阿るに至らず。宰我曰く、予を以て夫子を觀るに堯舜に賢れると遠しと。子貢曰く、其の禮を見て、其の政を知り、其の樂を聞いて、其の徳を知り、百世の後に由り、百世の王を等するに、之れ能く違ふと無き也。生民ありて、自り以來、未だ夫子の如きあらざる也と。有若の曰く、豈に惟に民のみならんや、麒麟の走獸に於ける、鳳凰の飛鳥に於ける、太山の丘垤に於ける、河海の行潦に於けるや、類也。聖人の民に於けるも類也。其の類に出て、其の萃を抜く、生民あつて、自り以來、未だ孔子より盛なるはあらざる也と。公孫丑、その宰我と云ひ、子貢と云ひ、將た有若と云ひ、如何に孔子を崇敬せしかは思ふべきにあらずや。

孟子の孔子

ふべきにあらずや。

孔子歿して百餘年にして孟子起る。而して孟子は最も能く孔子を知れる一人也。蓋し孟子は子思の學を繼げるもの也。然らば聖孫子思が孔子觀は何如。子思曰く、仲尼堯舜を祖述し、文武を憲章す。上天時に律り、下水土に襲ると。中庸是れ一は孔子の學の淵源とも見るべく、又一は子思の孔子觀とも見るべき言な

らずんばあらず。然るに孟子に至つては、孔子を仰ぐと彌大にして、その激稱の語は七篇に散見す。門人公孫丑問うて曰く、伯夷、伊尹は何如と。孟子曰く、道を同うせず。其の君にあらざれば、事へず。其の民にあらざれば、使はず。治まれば進み、亂るれば退く。は伯夷也。何れに事ふるとして君にあらざらん、何れを使ふとして民にあらざらん。治まるも亦進み、亂るも亦進む。は伊尹也。以て仕ふべければ仕へ、以て止まるべければ止まり、以て久らすべければ久らし、以て速にすべければ速にす。是れ孔子也。皆古の聖人也。吾未だ焉を行ふと有ると能はず。乃ち願ふ所は孔子



を學ばんと。伯夷、伊尹の孔子に於けるや、是の如く班しきや。曰く、否、生民あつて自ら未だ孔子あらざる也。と。公孫丑その激稱して措かざるを見るべし。

然るに孟子は他篇に於いては、惟に之を推稱するのみならず、更に之を批判し、孔子の特長を發揮して次の如く謂ひぬ。曰く、伯夷は聖の清なるもの也。伊尹は聖の任なるもの也。柳下惠は聖の和なるもの也。孔子は聖の時なるもの也。孔子は集大成とも謂ふべし。集大成とは金聲にして之を玉振する也。金聲とは條理を始むる也。之を玉振するとは條理を終はる也。條理を始むるは智の事也。條理を終はるは聖の事也。智は譬へば巧也。聖は譬へば力也。由白歩の外に射るが若し其の至るは爾の力也。其の中るは爾の力にあらざる也。と。萬章是れ孟子が孔子は群聖に拔きんじて古今獨歩と激稱し、生民以來孔子あらずとの門人が孔子觀を説明敷衍せるの言にあらずや。

一六 孔子の哲學

道

樹つ所愈高ければ見る所彌廣からざるを得ず。孔子十有五にして學に志し、晩年七十有四歳に至るまで進修不息、孳々として道惟れ疆めて彼の絶大なる人格を就す。その道とする所、豈に歲月と俱に高大を致さざらんや。孟子曰く、孔子、東山に登つて魯を小となし、太山に登つて天下を小となすと。盡心是れ孔子が道の發展の具體的説明と見るべき。恰好の形容辭にあらずや。然り孔子の道なるものは、春秋と與に發展して所謂人道の極致は直ちに天道に接するに造れるなりき。

蓋し孔子の所謂道は、之を合して謂へば政教の原理と云ふべく、之を分ちて謂へば外面的には政治的原理と云ふべく、内面的には倫理的原理と云ふべし。かくて孔子は遂に一貫なる根本的原理に到達せる也。

孔子學成るや、先聖王者に紹ぎ、斯道を以て天下の民を救濟せんとす。此の際



に於ける孔子の道なるものは、殆ど政治的原理にして所謂禮なるものは是れ也。論語に子曰く、齊一變せば魯に至らん、魯一變せば道に至らんと。雍也。是れ政治的原理にして、禮樂刑政を謂へるもの也。又論語に孔子曰く、天下道あれば、禮樂征伐、天子より出づ、天下道なければ、禮樂征伐、諸侯より出づと。季氏又曰く、天下道あれば、政、大夫に在らず、天下道あれば、庶人議せずと。季氏。その所謂道なるものは、明に政治的原理を謂へるものにあらずや。

然るに孔子は之を以て天下を救済せんとせしも、何如せん時不遇にして我を用へず、その昔月の抱負子路も徒に水泡に歸せしかば、退いて教を千載に垂れんと期す。是に於いてか政治的原理の外更に進んで主として倫理的原理を説くに至れり。論語に子曰く、士道に志して、惡衣惡食を恥づるは、未だ與に議るに足らざる也と。里仁論語に曰く、道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶと。述而。その志道の道なるものは、與に倫理的原理の謂ひにあらずや。又論語に子曰く、誰れか能く出づるに、戸に由らざらんや、何ぞ斯道に由ると。莫きやと。雍也。斯道とは人の踐むべき道にして、即ち仁の也也。又論語に子曰く、信を篤くし、學を好

み死を守つて道を善くすと。泰伯。是れ身を殺して仁を成す。衛靈公。ものにして、明に倫理的原理なるを謂へるものにあらずや。

然れども孔子の道なるものは、之を分離すべきものにあらず。所謂人道の上、に立てるものにして、大にしては社會、小にして個人を經理する道なるものなれば、寧ろ之を合して政教の原理と見るべきを可となす。論語に子、子産を謂つて、君子の道四あり、その己を行ふや、恭、其の上に事ふるや、敬、其の民を養ふや、惠、其の民を使ふや、義と。公治長。是れその前半は倫理的原理の方面にして、その後半は政治的原理の方面に屬する事也。然るに孔子は之を合して君子の道と謂へるは、即ち政教の原理の謂ひにあらずや。論語に子曰く、之を道くに徳を以てし、之を齊ふるに禮を以てすと。學而。是れ亦二者の相離るべからざる關係を説けるものにあらずや。

之を要するに、孔子は外面的には禮を以て政治的原理となし、内面的には仁を以て倫理的となし、之を合して政教の原理として道を説き、更に之を統合するに天なる思想を以て、此の兩者を一貫せるものならずんばあらず。



## 政治的原理

禮は政治の原理にして、經國の要典也。上は制度格式より、下は威儀作法を總稱し、該ねて又刑律習慣をも包含するもの也。

蓋し孔子の禮なるものは、その周禮を尙びたるを見ても、制度なるや、言ふを要せず。論語に子曰く、夏の禮、吾れ能く之を言ふも、杞、徵するに足らず。殷の禮、吾れ能く之を言ふも、宋、徵するに足らず。文獻、足らざるが故也。足らば、吾れ能く之を徵せんと。八佾、又論語に曰く、子張問ふ、十世知るべきや。子曰く、殷は夏の禮に因る、損益する所知るべき也。周は殷の禮に因る、損益する所知るべき也。其れ或は周に繼ぐものは、百世と雖も、知るべき也。と爲政、その夏禮と云ひ、殷禮と云ひ、周禮と云へるもの、皆是れ制度の謂ひにして、又制禮は爲政の根本なるを暗示せるもの也。論語に又子曰く、周は二代に鑑み、郁々乎として、文なる哉。吾れは周に從はんと。八佾、是れ周禮の備はれるを讚美せるもの。又論語に曰く、陣の司敗、昭公の禮を知れるやを問ふ。孔子曰く、禮を知れりと。孔子退く。巫馬期に揖し、之に進んで曰く、吾れ聞く君子は黨せずと。君子も亦黨するか。君、吳に取る。同姓と

爲す。之を吳、孟子と謂ふ。君にして禮を知らば、孰れか禮を知らざらんと。巫馬期以て告ぐ。子曰く、丘や幸なり、苟も過ちあれば、人必ず知ると。述而、是れ亦制度を謂へるにあらずや。

禮は制度を謂ふのみならず、更に格式の意を有す。論語に子曰く、管仲の器小なる哉と。或は曰く、管仲は儉なるか。曰く、管氏三歸あり。官事攝せず。焉ぞ儉なるを得んと。然らば、管仲禮を知るか。曰く、邦君樹して門を塞ぐ。管氏も亦樹して門を塞ぐ。邦君兩君の好を爲すに反坫あり。管氏も亦反坫あり。管氏にて禮を知らば、孰れか禮を知らざらんと。八佾、その三歸不攝と云ひ、樹門反坫と云ひ、皆是れ格式を謂へるもの也。又論語に曰く、子貢、告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、爾は其の羊を愛す。我は其の禮を愛すと。八佾、又論語に子曰く、麻冕は禮也。今や、純、儉なり。吾は衆に從はん。下に拜するは禮也。今は上に拜す。泰也。衆に從ふと雖も、吾は下に從はんと。子罕、その告朔の餼羊と云ひ、麻冕、拜下と云ひ、是れ明に格式を謂へるものにあらずや。

大にしては、制度格式小にしては、威儀、是れ孔子の所謂禮なるもの也。論語に



曰く、子、大廟に入つて事に問ふ。或は曰く、孰れか郷人の子、禮を知れりと謂ふや。大廟に入つて事毎に問ふと、子之を聞いて曰く、是れ禮也と。八佾その事毎に問ふ、是れ豈に作法にあらずや。又論語に子曰く、君に事ふるに、禮を盡くせば、人以て諂へりと爲すと。八佾行儀に契ひ、事式に當る、是れ亦その威儀を謂へるものにあらずや。論語に子貢曰く、貧にして諂ふことなく、富んで驕ることなきは何如。子曰く、可也、未だ貧にして樂み、富んで禮を好むものに如かざる也と。學而その好禮とは制度の謂ひにあらず、格式の意にあらず。正に威儀を愛好するの謂ひならずんば、あらず。又論語に曰く、孟懿子、孝を問ふ。子曰く、違ふことなかれと。樊遲御す。子之に告げて曰く、孟孫、孝を我に問ふ。我れ對へて曰く、違ふことなかれと。樊遲曰く、何の謂ひぞや。子曰く、生には之に事ふるに、禮を以てし、死には之を葬むるに、禮を以てし、之を祭るに、禮を以てすと。爲政その生事、以禮は、行儀を謂ひ、葬祭、以禮は、格式を謂へるもの也。

刑律は孔子の尙ぶ所にあらず。然れども、苟も上に制度の紀綱の嚴存するあり、人之を犯さば、焉ぞ刑律以て之を正さざるを得ざらんや。蓋し刑律は治亂の

藥石、國家一日も廢すべからざるものなれば也。惟だ其れ孔子は、消極的に、刑律を操り、積極的に、禮を以て根本より之を治めんとしたるのみ。論語に曰く、名正しからざれば言順ならず、言順ならずんば事成らず、事成らずんば禮樂興らず。禮樂興らずんば刑罰中らず、刑罰中らざれば、民手足を措く所なしと。子路此の言以て刑律を包含せるを見るべし。

禮は、管に制度、格式、威儀、作法を謂ふのみならず、更に君權を意味するとあり。論語に孔子曰く、天下道あれば、禮樂征伐、天子より出づ。天下道なければ、禮樂征伐、諸侯より出づと。季氏禮樂征伐とは、其の權を謂へるもの也。又論語に曰く、天下道あれば、政、大夫に在らず、天下道あれば、庶人議せずと。季氏政、大夫にあらずとは、亦その行政の權、君に存せるを謂ふ。是れ主權の謂ひにあらずや。蓋し此の意あるが爲め、正名の事起り、名分、大義の意、禮より發揮せらるゝものにあらずるか。

禮の意義の包含する所此の如し。然れどもその要を求め、その綱を尋ねれば、畢竟禮は社會組織の樞紐にして、政治的原理たるに外ならず。論語に曰く、能く



禮讓を以て國を爲ひる何かあらん。禮讓を以て國を爲ひると能はざれば禮を如何と。里仁その以禮爲國とは、是れ社會の樞紐、政治の原理たるを謂へるものにあらずや。

かく孔子は禮を以て政治的原理となし、而して其の制度の彬々乎として備はれるは周に在りとなせるも、孔子は古制そのまゝに之を當時に行はんとするが如き、迂遠の見を有するものにあらず。論語に曰く、顏淵邦を爲むるとを問ふ。子曰く、夏の時を行ひ、殷の輅に乗り、周の冕を服し、樂は韶武、鄭聲を放ち、佞人を遠ざく、鄭聲は淫、佞人は殆しと。衛靈公かく孔子は管に周公の制度を當世に恢復せんとしたるのみならず、更に進んで古代の制度を參酌して折衷せんとしたる遺意あるを見るべき也。

孔子は時代に應じて變禮の必要を認めたと、此の如し。然るに孔子は禮そのものゝ、外面的なるより、何等か内面的の基礎を得んとするものあるに至れり。蓋し禮は大にして政治の原理なりと同時に、小にして其の威儀作法たるは、その、外面的性質より一轉して、内面的性質を有せんとする楔子ならずんばあ

らず。論語に子曰く、君子博く文を學び、之を約するに禮を以てす。亦以て畔かざるべきかなと。雍也その約禮とは、是れ威儀の要諦にあらずや。

論語に又曰く、顏淵仁を問ふ。子曰く、克己復禮を仁となす。一日克己復禮せば、天下仁に歸す。仁を爲す己に由る人に由らんや。顏淵曰く、請ふ其の目を問ふ。子曰く、禮にあらざれば視ると、勿れ禮にあらざれば聽くと、勿れ禮にあらざれば言ふと、勿れ禮にあらざれば動く、と、勿れ。顏淵曰く、回不敏と雖も、請ふ斯の語を事とせんと。顏淵孔子が禮にあらざれば視聽言動すると、勿れとは、即ち復禮の謂ひ也。克己して復禮するは、是れ内外相應するのと也。内外相應するは、是れやがて禮の外面的なるより、内面的に進まんとする過渡期のものにあらずや。蓋し禮にして、全然外面的に止まり、更に内面的の基礎なからんか。遂に所謂法なるものと其の意義を異にするとなきに至らん。是れ決して孔子の本意にあらざる也。固より禮は法を包含するも、法の如き消極的のものにあらず。其の性積極的也。是れ其の積極性なるは、取りも直さず内外兩面を繋ぐ一條の連鎖ならずんば、あらず。論語に曰く、人にして不仁なれば、禮を如何人にして不仁な



れば樂を如何と。八佾包氏之を解して曰く、人にして仁ならざれば必ず禮樂を行ふと能はずと。是れ禮樂も人心に基かざるべからざるを説けるものにあらずや。論語に曰く、林放、禮の本を問ふ。子曰く、大なる哉。問ひ、禮は其の奢ならんよりは寧ろ儉せよ。喪は其の易ならんよりは寧ろ戚めよと。八佾是れ禮の大本實に人心に存せるを謂へるもの也。又論語に子曰く、禮と云ひ、禮と云ふ、玉帛を云はんや。樂と云ひ、樂と云ふ、鐘鼓を云はんやと。陽貨、是れ有形的の玉帛を列ね、鐘鼓を鳴らすのみ、必ずしも禮樂にあらずとの意也。然らば焉ぞ無形的、内面的の性質之が基礎を爲すものなからざるを得んや。是れ吾人が次に探究せんとする倫理的原理たる仁そのものならずんばならず。

倫理的原理

政治的の原理たる禮は、孔子の所謂道の一部にして、政教の原理として、社會組織の樞紐を爲すものなりと雖も、元、是れ先聖王者の用ひ來りしもの決して孔子の創説になれるものにあらず。是の故に、一世の木鐸、百代の師表としての孔子の生命は、寧ろ此にあらずして、彼に存すと謂ふべし。所謂孔子の生命なるも

のは、禮にあらずして仁に存するもの也。言ふまでもなく、禮は道の一部也。孔子の學の重要なものなりと雖も、而もその性質餘りに外面的にして、單に之のみを以てせば、道德上に於ては、詔に陥り、政治上に於ては、法に流るゝ弊なき能はず。是に於いて、か其の内面的基礎を求め、以て政教の大成を圖らざるを得ず。是れ孔子が先聖王者の志を紹ぎ、政治的の原理の外、更に倫理的の原理を説きし所以也。

仁は孔子の生命也。若し仁の一字を取り去らんか。その所謂道や空しく形骸を止めて、精神なきものとなるに至らんげに仁は孔子の上は先聖に紹ぎ、下は後王に對しての立脚地を爲せるもの也。而して仁の重大なると管に此の如くなるのみならず、倫理的の原理たると同時に、政治的の原理たる基礎を爲すものにして、所謂王道仁政なるものゝ根本を爲すもの也。此の點より見れば、孔子の道を一貫するものは仁なりと謂ふべし。然れども仁は禮と均しく道にして一貫するものにあらず。所謂人道としての政教の原理にして之を一貫するものはあらざる也。



そは、兎も角も、孔子の仁に對する觀念や、博大にして、甚深也。されば所謂仁者なるものに至つては、太だ尠く、堯舜禹湯文武周公を除くの外、微子箕子比干夷齊、及び稍下りて管仲の十有三人に過ぎず。殊に管仲を稱せるは、僅に博施濟衆の功を以て之を容したるのみ。憲問その他當時の賢者に就いて之を見るも、令尹子文の忠も、陳文子の清を以ても、公冶長尙ほ未だ孔子の仁者とは稱せられざる也。

翻つて之を三千の門人中に就いて見むか。孔門の下、多士濟々として聚まる。然れども原憲の寡欲を以ても、仁は吾れ知らずと云はれ、憲問仲弓の徳を以ても、其の仁を知らずと云はれ、公冶長子路の勇、冉求の才を以てするも、尙ほ且つ僅に其の心、三月仁に達はずと稱せられしに過ぎず。雍也否、孔子の謙讓なる親らも、尙ほ此に居らざる也。論語に子曰く、聖と仁との若きは、吾れ豈に敢てせんや。抑も之をなして厭はず、人を誨へて倦まず、則ち爾謂ふべきのみと。公西華曰く、正に唯弟子學ぶこと能はざる也と。述而あり、孔子の聖を以てすら敢て自ら此に居らず、以て其の

仁の如何に博大にして、甚深なるを想ふべきにあらずや。然らば、則ち孔子の仁とは、其の意義や、何如。

蓋し仁の主要なる意は親愛の義也。論語に曰く、樊遲仁を問ふ。子曰く、人を愛すと。顔淵又論語に宰我問うて曰く、仁者は之に告げて、井に仁ありと雖も、之に従ふや。子曰く、何ぞ其の然るを謂はんや。君子は逝くべき也。陥るべからず。欺くべき也。罔ふべからざる也と。雍也。以て仁とは人を愛し、能く其の難を救ふに急なる情あるを見るべし。論語に又曰く、汎く衆を愛して仁に親しむと。學而是を以て仁の主要なる意義は親愛に在ることを知るべきにあらずや。

然れども孔子は汎く衆を愛すと謂ふも、平等的の愛を唱へたるものにあらず。即ち差等的の愛を謂へるもの也。論語に子曰く、惟だ仁者は能く人を好み、能く人を惡むと。里仁その人を好惡するとは、已に差等的の意を表せるものにあらずや。孟子曰く、吾が老を老として、以て人の老に及ぼし、吾が幼を幼として、以て人の幼に及ぼす。天下をば掌に運らすべしと。梁惠王是れ孔子が差等的の愛を最も能く具體的に説明せる語なり。又論語に或は曰く、徳を以て怨に報ずる



は、何如と。子曰く、何を以て徳に報いん。直を以て怨に報い、徳を以て徳に報ゆと。  
 (憲問)是れ汝の敵を愛する平等的の愛と大に異なるものにあらずや。  
 親愛の義に亞ぎて仁の主要なる意は忠恕の義也。論語に子曰く、參か吾が道  
 一以て之を貫く。曾子曰く、唯と。子出づ。門人問うて曰く、何の謂ひぞや。曾子曰く、  
 夫子の道は忠恕のみと。里仁蓋し忠恕の言は曾子の語なりと雖も、抑も亦仁の  
 意義なるを窺ふに足るにあらずや。論語に曰く、仲弓仁を問ふ。子曰く、門を出づ  
 るに大賓を見るが如く、民を使ふに大祭に承ふるが如く、己の欲せざる所人に  
 施すと勿れと。顔淵是れ明に曾子が言の當れるを見るべし、而も忠恕は仁の主  
 要なるものなるを見るべし。論語に又子貢問うて曰く、一言にして以て終身之  
 を行ふべきものありや。子曰く、其れ恕か。己の欲せざる所人に施すこと勿れと。  
 (衛靈公)以て孔門の下に於て忠恕の仁の主要なる意義として、將た又修身の要  
 諦として、如何に尊重せられしかを見るべし。  
 蓋し恕の性質や消極的にして、愛の性質は積極的也。恕は所謂己の身を捻つ  
 て人の痛さを知るもの也。されば仁の意義としては未だ至れるものにあらず。

恕ありて而して愛あり、愛に仁の本義全く成る。論語に子貢曰く、如し博く民に  
 施して能く衆を濟ふとあらば何如仁と謂ふべきか。子曰く、何ぞ仁を事とせん、  
 必ずや聖か。堯舜も其れ猶ほ諸れを病めり。夫れ仁者は己立たんと欲して人を  
 立て己達せんと欲して人を達せしむ能く、近く譬を取る、仁の方と謂ふべきの  
 みと。雍也是れ消極的恕より積極的愛に至り、兩者相ま須ちて仁の本義を成せ  
 るを見るべし。殊に近く身に譬を取り、己の欲する所を人に施すは仁の方術也  
 と謂へるが如きは、最も能く愛恕の關係を見るを得む。  
 仁の第三の意義は恭敬也。論語に曰く、樊遲仁を問ふ。子曰く、居處恭しく、事を  
 執るに敬にして、人と忠なれば、夷狄に之くと雖も棄つべからざる也と。(子路)以  
 て恭敬は仁の一意義たるを見るべし。子張仁を孔子に問ふ。孔子曰く、能く五者  
 を天下に行ふものを仁となすと。之を請ひ問ふ。曰く、恭寛信敏惠。恭なれば侮ら  
 ず、寛なれば衆を得、信なれば人焉に任じ、敏なれば功あり、惠なれば以て人を使  
 ふに足ると。陽貨その恭なれば侮らずとは、是れ恭敬の仁の一資質たる左券に  
 あらずや。



仁の第四の意義は寛厚也。論語に子曰く、里仁を美と爲す、擇んで仁に處らざれば焉ぞ知を得んと。里仁、朱子之を解して曰く、里は仁厚の俗あるを美と爲すと。是れ寛厚を以て仁の一資質となせるものにあらずや。又論語に曰く、君子親に篤ければ民仁に興り、故舊を遺ざれば民偷すからずと。泰伯蓋し篤親とは亦寛厚の意に外ならざる也。夫の子張が仁を問ふや、孔子之に答へて、五者を挙げ、寛なれば衆を得と謂へるを見ても、寛厚は仁の一資質なるを知るべし。

第五に數ふべき仁の意義は信義の謂ひ也。論語に曰く、子貢政を問ふ。子曰く、食を足らし、兵を足らし、民之を信ず。子貢曰く、必ず已むとを得ずして去らば斯の三者に於て何れをか先きにせん。曰く、兵を去らん。子貢曰く、必ず已むことを得ずして去らば斯の二者に於て何れをか先きにせん。曰く、食を去らん。古より皆死あり。民、信なければ立たずと。顏淵蓋し此に所謂信とは教化の意にして、今謂ふ信義とは多少趣を異にする者なきにあらずと雖も、要は大同にして小異也。論語に又子曰く、人にして信なくんば其の可なるを知らず。大車輓なく、小車軌なくんば、其れ何を以て之を行らんやと。爲政以て信の重んずべきと見るべし。

し。孔子が子張の問ひに答へて、信なれば人焉に任ずとは、蓋し亦此の意にして以て仁の一資質なるを知るべし。

第六に數ふべき仁の意義は剛毅の謂ひなり。論語に子曰く、剛毅木訥、仁に近しと。子路又論語に曰く、司馬牛仁を問ふ。子曰く、仁者は其の言や訥と曰く、その言や訥斯ち之を仁と謂ふか。子曰く、之を爲す難し、之を言ふ訥なきを得んやと。

(顏淵)難きを忍び、言を苟もせざる是れ剛毅にあらずや。論語に又子曰く、巧言令色、鮮いかな。仁と學而意ふに、巧言令色と剛毅木訥とは正反對也。剛毅なるものは令色せず、木訥なるものは巧言なる能はず。されば巧言令色の仁に遠きは、やがて剛毅木訥の仁に邁き所以也。又論語に曰く、顏淵仁を問ふ。子曰く、克己復禮を仁となす。一日、克己復禮なれば、天下仁に歸す。仁を爲す己に由り、人に由らんやと。顏淵己が私慾に勝ちて禮に反さらず、是れ豈に剛毅の性より出づるものにあらずや。又論語に曰く、樊遲仁を問ふ。子曰く、仁者は難を先きにして獲を後にす。仁と謂ふべしと。雍也、程子先難を解して、克己と爲せり。要するに難きを先きにするとは、其の性剛毅ならざるを得ざるもの也。



勇氣は仁に缺くべからざる一資質也蓋し仁者は必ず大勇なかるべからざれば也。論語に曰く、義を見て爲さざるは勇なき也と。爲政又曰く、仁者は必ず勇あり、勇者は必ずしも仁ならずと。憲問、既に義を見て爲すの大勇あり、仁者焉ぞ進取せざらんや。論語に子曰く、仁に當つて師に譲らずと。衛靈公蓋し仁者は此の氣魄あり、又何ぞ萬難を辭せざる樂なかるを得んや。論語に又子曰く、志士仁人、生を求めて仁を害するとなし、身を殺して以て仁を成すありと。衛靈公是れ仁の剛健なる意志の上に樹たざるべからざるを知るべきと、俱に勇氣の仁に缺くべからざる第七の資質に數ふべき意義にあらずや。

見れば恭敬と云ひ、信義と云ひ、剛毅と云ひ、將た勇氣と云ひ、孔子が仁の資質の重なるものは、甚だ嚴肅的にして、韓圖の所謂義の爲めに義を爲すが若き觀なきを得ず、然れども偏固は孔子の大に避けし所にあらずや。是れ夫の嚴肅的資質の外、靜樂の要素なかるべからざる所以にして、靜樂は當に其の第八に數ふべき一資質ならずんばあらず。

論語に子曰く、君子の道三、我れ焉を能くするとなし。仁者は憂へず、知者は惑

はず、勇者は懼れずと。子貢曰く、夫子自ら道へる也と。憲問、又子曰く、知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れずと。子罕、その憂へずして、悠悠々天地を樂むの情、是れ豈に仁の最もゆかしき所にあらずや。論語に子曰く、不仁者は以て久しく約に處るべからず、以て長く樂しみに處るべからず、仁者は仁に安んじ、知者は仁を利すと。里仁、又以て仁に於ける、靜樂の缺くべからざる資質なるを見るべし。論語に又子曰く、知者は水を樂しむ、仁者は山を樂しむ、知者は動き、仁者は靜、知者は樂しむ、仁者は壽と。雍也、其の靜に天命を樂しむとは、是れ仁の重要な一要素にあらずや。

愛、恕、敬、寛、信、毅、勇、樂の八者は、仁の内面的資質也。倫理的原理としての要素也。然るに仁は、常に倫理的原理たるのみならず、所謂政教の原理なれば、勢、外面的の資質なかるべからず、即ち政治的、原理の要素を有せざるべからず。是れ以上八者の外に、知的要素として、敏、慧と、利、澤との意義なかるべからざる所以也。蓋し仁は、内に於いては人の徳を成し、外に於いては世の功を就すものなれば也。

凡そ世に功を成さんとせば、宜しく敏、慧ならざるべからず、而して敏、慧なら



んと欲せば、須らく學を爲さざるべからず。論語に子曰く、由や女、六言六蔽を聞けるか。對へて曰く、未だし居れ吾れ女に語らん。仁を好むて學を好まざれば、其の蔽や愚知を好むて學を好まざれば、其の蔽や蕩信を好むて學を好まざれば、其の蔽や賊直を好むて學を好まざれば、其の蔽や絞勇を好むて學を好まざれば、其の蔽や亂剛を好むて學を好まざれば、其の蔽や狂と陽貨その好學好知皆是れ敏慧の事にして、即ち仁者は愚ならず、所謂欺くべきも、罔ふべからざるもの也。雍也取りも直さず、仁者は知的要素を有せざるべからざるもの也。夫の子張が仁を問へるや、孔子は恭寛信敏惠の五者を數へて、敏なれば功ありと謂へりしもの之を證して餘りあるにあらずや。

博施濟衆は仁の窮竟の目的也。是れ仁が政教の原理として、禮の基礎を爲す所以のものならずんば、あらず。論語に子貢曰く、管仲仁者にあらざるか。桓公、公子糾を殺すや、死すると能はず、又之に相たり。子曰く、管仲桓公を相けて、諸侯に覇たらしめ、一たび天下を匡す。民今に至るまで、其の賜を受く。管仲微りせば、吾れ其れ髮を被り、衽を左にせむ。豈に匹夫匹婦の諒を爲し、自ら溝瀆に經れて之

を知ることなきが若くならんやと。憲問又論語に子路曰く、桓公、公子糾を殺すや、召忽は之に死し、管仲は死せず。曰く、未だ仁ならざるか。子曰く、桓公諸侯を九合するに、兵車を以てせざるは、管仲の力也。其の仁に如かんや、其の仁に如かんやと。憲問孔安國之を解して曰く、誰れか管仲の仁に如かんやと。以て利澤の仁の主要なる資質なるを見るべし。又論語に子曰く、如し王者あらば、必ず世にして後仁と。子路蓋し三十年を一世と爲す。何晏の集解に、孔安國曰く、如し受命の王者あらば、三十年にして仁政乃ち成らんと。爰に謂ふ仁も、亦利澤の義也。孔子かの子張に對へたる、惠なれば人を使ふに足るとの如きは、亦利澤の義ならずんばあらず。

孔子の仁の内容は、愛、恕、敬、寬、信、毅、勇、樂、敏、澤の十者にして、之を内面的に謂へば、知情意の修養せられたる徳にして、之を外面的に謂へば、徳の發動せる功果の謂ひに過ぎず。固より仁の内容を精細に分類せば、敢て此の十者に限れるにあらず。蓋し仁は諸善衆徳の湊匯なれば也。然れども倫理的原理として、將た政教の原理として、今その重要なるもののみを以て謂へば、以上の十者に於いて



大體を竭せりと謂ふべきか。

抑も孔子の仁は倫理的原理として、寧ろ政治的原理たる禮の基礎を爲すものなれば、所謂政教の原理として、孔子の之を重んずること殆ど至れり盡せりと謂ふべし。論語に子曰く、苟も仁に志せば、惡なき也。と。里仁は是れその如何に重んぜるかを見るべき言ならずや。又論語に子曰く、富と貴とは是れ人の欲する所也。其の道を以てせざれば、之を得るも處らざる也。貧と賤とは是れ人の惡む所也。其の道を以てせざれば、去らざる也。君子仁を去つて、惡くんか名を成さん。君子終食の間も仁に違ふとなく、造次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是に於てすと。里仁その仁の一字、眞に是れ君子の生命と爲せる光景見るべきにあらずや。論語に又子曰く、民の仁に於けるや、水火よりも甚だし。水火は吾れ踏んで死するものを見る。未だ仁を踏んで死せるものを見ざる也。と。衛靈公是れ孔子の仁道なるもの、至つて博大甚深にして、人の敢て能く之を爲すことなきを嘆ぜるものにあらずや。是れやがて半面に仁の政教の原理として、最も樞軸を爲せるを謂へるものにあらずや。論語に子又曰く、仁遠からんや、我れ仁を欲せ

ば、斯に仁至ると。述而荀氏之を解して曰く、仁道遠からず、之を行へば、是に至る也。と。江熙も亦曰く、復禮一日なれば、天下仁に歸す。是れ仁至近也。是れ孔子の道なるものは、禮と仁との謂ひにして、要仁の一字に歸著するを謂へるものにあらずるか、非か。

根本的原理

禮と仁とは政教の原理にして、孔子の道なるもの也。決して論語の所謂一貫の謂ひにあらず。然るに古來の學者多く、一貫を以て直ちに「一貫の道」となし、「一貫と道」とを混同するもの尠からず。即ち宋儒の如きは、理を以て「一貫の道」と稱し、仁齋徂徠の如きは、仁を以て「一貫の道」となし、或は忠恕を以て「一貫の道」と充て、或は誠を以て之に擬し、甚だしきは中庸禮仁の三者を以て「一貫の道」と爲すものあり。

若しそれ仁が一貫の謂ひならば、是れ仁を以て仁を貫くものにあらずや。若し誠を以て一貫と爲さんか、仁と禮とは孔子の道として、至高のものにあらずるに至らん。然れども仁と禮とは、まさしく孔子の道にして、政教の原理として



最も至れるもの也。且つや誠は子思が形而上學に於ける根本的思想にして、孔子の説きしものにあらざるを如何せん。若し忠恕を以て一貫の道となさんか、惜しむらくは忠恕の二字は未だ仁と禮との全體の意義を包容すること能はざるを如何せん。且つ夫子の道は忠恕のみと謂へるは里仁會子の語にして、孔子の言に、あらず。若し又中庸禮仁の三者を以て一貫の道となさんか。是れ一貫にあらずして三貫也。矛盾の甚だしき天下豈に焉れより大なるものあらんや。以上は畢竟するに皆道と云へる語と一貫と云へる語とを混同して一貫の道と稱せるより起れる最大なる謬見ならずんばならず。此の點より見れば、吾人は宋儒が一貫を以て理と解せるを以て大に勝れりとせざるを得ず。然れども宋儒の理は自己の哲學説にして、孔子の所謂一貫の謂ひにあらざるを如何せん。所詮孔子が一貫を解するには論語に據るより外はなき也。

然らば孔子の道とは何ぞや。禮と仁との謂ひ也。仁と禮とは孔子の所謂道そのもの也。決して一貫の謂ひにあらず。若し禮と仁とを以て道となすと同時に一貫となさんか。仁禮を貫くもの仁禮也。とならん也。蓋し孔子は斯かる重複の

言をばなさいる也。然らば一貫とは何ぞや。一を以て貫くの謂ひ也。道即ち禮と仁とを貫いて之を攝理統會するの謂ひ也。

然らば一とは何ぞや。請ふ先づ論語に於ける一貫の語を検して、而る後更に之を論ぜむ。論語に曰く、

子曰參乎吾道一以貫之。曾子曰唯。子曰出門人問曰何謂也。曾子曰夫子之道忠恕而已矣。里仁

子曰賜也女以予爲多學而識之者與。對曰然。非與。曰非也。予一以貫之。衛靈公

その吾道一以貫之と謂ひ予一以貫之と謂ふ語を見るに之を貫くの之とは道の謂ひ也。若し夫れ一貫と道とを並せ稱して一貫の道となさんか。然らば之を貫くとは道を貫くものは道なりとならん。是れ無意味の語也。故に道を貫くものは一也と解せざれば孔子の眞意を得たりと爲すべからず。既に然らば道と一貫とは全然區別すべきものにあらずや。

由來多くの學者は孔子が天人合一の思想を以て論語に求むべからず、その之れあるは易の繫辭傳の思想と爲す。吾人は繫辭傳の或る部分は確かに孔子



の作たるを疑はざるものなれども、今は姑らく従來の學者の説に従ひ、やゝ之を疑ふべきものとして、彼に據らず専ら論語に依つて、孔子が天人合一の思想を尋釋せんと欲す。

然るに従來の學者は、論語には孔子が天人合一の思想なしとするもの甚だ多し。是れ復た吾人の見る所と異ならざるを得ざる所とす。吾人は既に孔子の人格に於いて、孔子の宗教的感情の發達として、所謂孔子の宗教的思想の一斑を窺ひぬ。宗教的感情参照然るに論語に曰く、季路鬼神に事へんことを問ふ。子曰く、未だ人に事ふること能はず、焉ぞ能く鬼神に事へん。敢て死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉ぞ死を知らんと。先進あるを以て、人或は孔子は宗教上の談を爲さずとするものあり。蓋し鬼神に事ふると及び死を知ると、是れ共に宗教上の事にして、孔子の此の答なるものが消極的なるを以て、眞に孔子は全然宗教上の談を爲さずと速斷するが如きは、是れ思はざるの甚だしきもの也。又論語に子貢曰く、夫子の文章は得て聞くべきも、夫子の性と天道と言ふとは得て聞くべからざる也。公冶長蓋し文章とは言ふまでもなく、詩書禮樂の意にし

て、性と天道とは、宗教及び哲學上の事也。而して又是れ人の孔子が宗教及び哲學の事を説かざるを證せんとする文にあらざるはなしと雖も、多くの學者の思惟するが如く、論語に於いて孔子は果して宗教哲學の談をなさざりしか。論語に曰く、子罕に利と命と仁と言ふと、子罕仁を説くこと彼が如く多く、命と言ふとも太だ少からず、その利と言ふに至つては甚だ罕なりと雖も、亦敢て絶無なるにあらず、而も論語の記者は、此の三者を以て、之を子罕と謂へるにあらずや。且つそれ性と天道と言ふとは聞き得べからずとは子貢の言にして、孔子の語にあらず。然らば焉ぞ之を以て直ちに孔子が性と天道との談論なしとの證とすることを得んや。吾人は既に孔子が宗教的感情に於いて、其の宗教的思想を窺ひ、孔子の天命を信ずるとの堅實なるを見れば、爰には更にその哲學的思想の一斑を窺はんと欲す。

論語に曰く、吾れ五十にして天命を知ると。爲政その知天命の三字は、是れ豈に宗教及び哲學上のものにあらざるや。又論語に子曰く、我に數年を加へて五十以て易を學ば、以て大過なかるべしと。述而孔子晩年に易を好めるは事實也。史



記に曰く、易を讀み、韋編三たび絶つ。曰く、我に數年を假し、是の若くならば、我れ易に於いて彬々たらんと。世家かの十翼なるものは、よし孔子の作にあらずとするも、晩年に及んで易を學び、易を愛好せしは、此等に徴して認むるを得べし。既に孔子、易を讀めり、焉ぞ哲學的思索なきを得ざらんや。又焉ぞ天人合一の思想に到達するとなきを得ざらんや。

孔子は既に五十にして天命を知り、篤く之を信ぜる人也。蓋し天命とは聰明なる叡智と剛健なる意志とを有せる實在が、常に吾人に臨み、吾人に命令するの謂ひ也。然らば則ち知るべし。知天命の三字は、既に孔子が天人合一の思想あるを明に表はせるものなるをこれと同時に此の三字は又人生と宇宙とがその根柢を同じうせるを道破せるものにあらずや。

意ふに子貢が夫子の性と天道とは得て聞くべからずとは、恐らくは孔子が尙ほ五十歳前後に於ける時の言にあらざるか。何となれば孔子此の時、既に天命の絶大なるを知るも、その思想未だ圓熟せざるものありしなちん。従つて之を發せざりしは、やゝ之を認め得べければ也。又孔子が子貢及び曾子に對して

一貫を謂へるは、恐らくは六十歳以上の時ならんか。蓋し孔子は此の時既に隱者とも遭遇し、又易の哲理をも研鑽して、大に發明する所のものありしならんを以て也。且つや予一以貫之と謂ひ、吾道一以貫之と謂へるは、決して初學者に對して謂ふべき言にあらざれば也。何となれば孔子も、中人以上は上を語るべく、中人以下は以て之を語るべからざる也。雍也謂ひたるものあれば也。而して上とは下學して上達すの憲問上達となれば也。又論語に子曰く、君子は上達し、小人は下達すと。憲問是れその明證にあらずや。門人の超世思想參照

史記の列傳を案ずるに、子貢は孔子より少きと、三十一歳。曾子は孔子より少きと、四十六歳也。弟子傳假りに、子貢が三十歳にして一貫の言を聞くとせば、孔子その時六十一歳也。又假りに、曾子二十五歳にして一貫の言を聞くとせば、孔子その時七十一歳也。固よりその何年比に此の言ありしやを想定し得べきにあらず。又兩者に對して前後なりしや、將た同時なりしや、は到底知るべきにあらず。雖も孔子の歿せし時は、子貢の年四十三にして、曾子の年は二十八也。是等を以て想像するに、孔子が一貫の言ありしは、六十歳以上なりしは、殆ど疑ふ



べからざるにあらざるや之をかの吾れ五十にして天命を知り六十にして耳順ふと謂へる言に徴しても孔子は六十以上に於いて益天人合一の思想の圓熟せるを見るべきにあらざるや従つて又孔子が曾參子貢の二俊髦に此の言ありしは六十歳以上なりしとするは蓋し中らずと雖も亦遠からざるにあらざるや吾人は假定の説を爲して孔子の一貫の語は六十歳以上に發せるものなりとなせりそはともかくも孔子の所謂道と一貫とは全然區別すべきものにして同視すべきものにあらざる既に同視すべからずとせば孔子の至大なる禮と仁との道を一貫するものは宜しくそれ以上のものならざるべからざるにあらずや而してそれ以上の絶大なるもの果して吾人が心理的現象に求むべきか將た社會的現象に之を求むべきか然りと雖も心理的現象も社會的現象も俱に仁と禮とに攝理せらるゝに於いては尙ほ綽々として餘裕あるを如何せん是に於いてか斯道を一貫するものは宜しく思慮を超越せる絶大なるものを求めざるべからざる然るに孔子がそれ以上に於いて絶大なるものとして篤く之を信ぜざるものは唯だ天あるのみ

論語に孔子曰く君子三畏あり天命を畏れ大人を畏れ聖人の言を畏る小人天命を知らずして畏れざる也大人に狎れ聖人の言を侮ると季氏それ此の如く孔子は既に天命を知り天命を畏敬せる也而して其の之を畏敬せし所以のもの主として天の剛健不息なる意志の絶大なるを知らば也論語に又子曰く命を知らざれば以て君子と爲すとなき也と堯曰是れ天命を知らざるものは未だ道の淵源する所を知らざるを謂へるものにあらずや是れ吾人が一貫を以て天と爲すその主要なる原因ならざらんばあらず更に進んで孔子が天人合一の思想に到達せしものを見んか論語に子曰く我を知るとなきかな子貢曰く何ぞ其れ子を知るとなしと爲さんや子曰く天をも怨みず人を尤めず下學して上達す我を知るものは其れ天かと憲問是れ孔子が天人合一の思想に達せるを自白せし言にあらずや何晏の集解に孔安國之を解して曰く下學而上達とは下人事を學び上天命を知る也又何晏曰く聖人天地と其の徳を合す故に唯天己を知る也と以て孔子が天命を知れるはやがて天人合一の思想に到達せし所以なるを知るべし



孔子既に天を知り命を畏れ唯だ天を以て絶大と爲す是に於いてか道を一貫するもの豈に此の外に求むべき餘地あらんや。論語に子曰く大なる哉堯の君たるや巍々乎たるかな唯だ天を大なりと爲す唯だ堯之に則り蕩々乎として民能く之を名くるとなしと。泰伯何晏の集解に孔安國曰く則は法也堯能く天に法つて化を行へるを美むる也と。その則之の二字是れ明に一貫なることを説明せる語にあらざるや。且つ孔安國が法天行化の四字を以て解したるは最も能く孔子の遺意を得たるものにして又道を貫く一とは全く是れ天なるを道破せるものにあらずや。

天は既に一貫にして道を貫くもの也。即ち道を一貫する根本的原理也。道なる仁と禮とは必ず之に淵源せざるべからざるもの也。然るに孔子の天を寫象するや多くは宗教的なりしも亦哲學的に之を寫象せると敢て絶無なるにあらず。論語に子曰く予言ふとなからんと欲す。子貢曰く子如し言はざれば小子何をか述べん。子曰く天何をか言はん。四時焉に行はれ百物焉に生ず。天何をか言はんやと。陽貨是れ孔子が明に哲學的に天を寫象せるものにしてその天な

る意義も亦能く繫辭傳中の天と符を合するを覺ゆ。その異なる所を強いて求めば彼は活動的一元の世界觀なるに此は人格的一元の世界觀なる別あるのみ。然れども論語に於ける孔子の世界觀はその既に四時行焉百物生焉と謂へるより之を見れば亦その天なるものは靜止的にあらずして活動的なりと謂ふべし。之を要するに孔子は人格的活動的實在を天と稱し之を以て道を一貫するものなりとなせるもの也。以上の所論に據つて之を見れば論語に於ける孔子は夙に天人合一の思想に到達しその絶大なる天を以て仁と禮との道を一貫し終に人道の極致は直ちに天道に接するの意に造れるものなりと謂ふべきか。

認識

孔子が哲學のとを説くや敢て認識の上に根據を置けるものにあらず。然れども認識に關する説亦敢て絶無なるにあらず。論語に子曰く君子は上達し小人は下達すと。憲問上達すとは蓋し知天命の謂ひ也。又論語に子曰く中人以上



は、以て上を語るべく、中人以下は、以て上を語るべからざる也と。雍也上とは上達の意にして、即ち形而上の事を謂へるもの也。而して孔子は認識に先天後天の二種あるを認め、先天的認識を以て生知となし、之を認識の根本となせるが如し。論語に子曰く、我れ生れながらにして之を知るものに、あらず。古を好み、敏にして之を求めたるもの也と。述而皇侃は、知之を解して、事理を知るを謂ふ也と曰へり。又論語に子曰く、蓋し知らずして之を作すものあらん。我れは是れなき也。多く聞き、其の善なるものを選んで之に従ひ、多く見て之を識すは、知るの次也と。述而何晏の集解に、孔安國曰く、此の如きは生知のものに次ぐ也と。然れば、不知作之とは、即ち生知の意にして、先天の認識の謂ひ也。又論語に孔子曰く、生れて知るものは上也。學んで之を知るものは次也。困んで之を學ぶは、又其次也。困んで學ばず、民斯ち下を爲すと。季氏こは孔子が明に先天的認識を認めて之を上知と爲せるもの也。

孔子が先天の認識を認めたるは、それ此の如し。然れども、先天の認識は必ずしも孔子の尊重する所にあらずして、寧ろ後天的認識に重きを置き、經驗學知

を主張するものに似たり。こは蓋し孔子が多年教育に従事したる結果、かゝる傾向を來せるものならんか。論語に子曰く、唯上知と下愚とは移らずと。陽貨蓋し、上知とは生知のと也。下愚とは困愚のと也。孔子は先天の認識を認むると同時に、經驗的認識の重大なるを知り、多年之を以て教育に従事せしに、生知と困愚とは其の差甚だしく、困愚は到底教ふべからざるを見て、此の嘆ありしものならん。然れども、學知と困學とは、怠るとなく、進修せば、終に上知の壘を摩するを認むるに至れり。孔子の經驗的認識を重んじたる所以、畢竟茲にありと謂ふべきか。

#### 人性

人性は孔子の敢て研究せし所にあらず。されば人性に關しては、餘り多く説かず。惟だ性相近き也。習相遠き也と。陽貨謂へる言あるのみ。こは洵に常識的の言にして、人性は略ぼ相類すと云ふに過ぎざれば、善とも將た惡とも云へるに、あらず。然れども、吾人は此の言を見ても、尙ほ孔子は經驗を重んじたるを知ることを得。そは習慣は第二の性を爲すべきを知るべければ也。



孔子の人性の説は極めて常識的なるも、而も之を擴充せば勢、孟子の性善論となるべき傾向を有す。論語に子曰く、人の生まるゝや直之を罔けて生まるゝや幸にして免ると。雍也論語に又曰く、斯の民や三代の道を直くして行ひし所以也。衛靈公私曲なく公平に治めらるゝ民は、既に性に其の直なる素質あるを謂へるもの、是れ性善の傾向ある所以のものならずや。

死 生

孔子が死生に對する觀念は、恰も人性のその如く、亦甚だ常識的也。されば生とは活動不息の如く、死とは猶ほ靜止休息の如く思惟せるに似たり。論語に曰く、老いて死せざる是を賊と爲すと。憲問皇侃之を解して曰く、壤年已に老いて未だ死せず、不敬の事を行ふは徳を賊害する所以也と。されば老いて死するは寧ろ必然の事と認めたるが如し。列子に曰く、子貢學に倦み、仲尼に告げて曰く、願はくば息ふ所有らん。仲尼曰く、生は息ふ所なし。子貢曰く、然らば賜や息ふに所なからんか。仲尼曰く、有り、其の壙を望めば、畢如たり、幸如たり、墳如たり、鬲如たり、則ち息ふ所を知らんと。子貢曰く、大なる哉、死や、君子焉に息ひ、小人焉に

伏すと。天瑞此の説又荀子の大略に出づ。文長短の相異あれども、大指變ることなければ、稍之を孔子の説として信ずるとを得むか。若し之を然りとせば、略ぼ孔子が死に對する觀念を知り得べくと俱に、その生なるものは大々の活動を爲さざるべからざるを説けるは實に孔子の意を得たるが如く覺ゆる也。



### 一七 孔子の倫理

#### 三 德

儒教に於ける倫理の大要は三綱五常の説を以て竭せり。三綱とは君臣父子夫婦にして、之に二を足らせる五倫とは、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あるもの是れ也。滕文公而して五常とは仁義禮智信の徳の謂ひ也。蓋し三綱と五倫とは人の義務を規定せるものにして、五常は其の徳目なるが、こは孔子の説きしものにあらず。後世の學者が孔子を祖述して、此の名目あるに至りし也。されば孔子は別種の徳目を立て、曰く、知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れずと、子罕而して此の語、復た憲問篇にも出て、之を君子の道三と爲せり、然るに子思に至つては、之を三達徳と稱せり、曰く、知仁勇の三者は天下の達徳也と、中庸爾來知仁勇の三を以て三達徳と曰ふ。意ふに、知仁は後世の五常説の基礎を爲し、孔子が夫の景公に對へたる君臣父子の語は、顏淵發展して三綱五倫の説となれるものか。

#### 孝 弟

仁は管に禮の基礎を爲すのみならず、亦諸徳の根源也。而して其の性、平等的汎愛にあらずして、差等的の親愛也。是れ孔子が仁の第一著歩として、家族的孝道より始まりざるべからざる所以也。門人有子、之を道破して、謂ひけらく、其人と爲りや孝弟にして上を犯すとを好むもの鮮し。上を犯すとを好まずして、亂を作すとを好むものは未だ之れあらざる也。君子は本を務む、本立つて道生ず。孝弟や其れ仁を爲すの本かと、學而是れ眞に孔子の意を得たるもの也。論語に子曰く、弟子入つては孝出で、は弟謹んで信じ、汎く衆を愛して、仁に親しむ。行餘力あらば、以て文を學ぶと、學而是れ孔子が普通一般人の爲めに進學修徳の序を説けるもの、亦以て孔子が如何に近きより始めたりしかを見るべきにあらずや。

弟とは悌の謂ひにして、孝の一字に攝せらるべきもの也。蓋し孔子の孝とは少くとも敬愛、聽從、養志、微諫の四意を有す。

孝の第一義は敬愛也。蓋し父子の情は天性にして、人の至情なるものなれば



也。之を父母より見むか。所謂父母は唯だ其の疾之れ憂ふ爲政ものにして、父母の子を愛するの心は至らざる所なきものなれば也。之を子より見むか。所謂父母の年は知らずんばあるべからず。一たびは以て喜び、一たびは以て懼る(里仁)いものにして、父母の年を知れば其の壽を喜ぶと俱に、又その衰に近きを惧るいは是れ子たるもの、至情免るべからざる所也。既に父子の間、此の已むべからざる至情のあるあり、是れ敬愛の孝の第一義たる所以ならずんば、尙論語に曰く、子游、孝を問ふ。子曰く、今の孝は是れ能く養ふと謂ふ。犬馬に至るまで皆能く養ふあり、敬せざれば何を以て別たんやと(爲政)是れ孝養も、孝なれども、敬愛は更に焉れより大なるものなるを説けるものにあらずや。

孝の第二義は聽從にして服従するとは是れ也。然り既に孝の第一義として父母を敬愛す焉、其の言に聽從せざるを得ざらんや、是れ聽從の第二義を爲す所以也。論語に曰く、孟懿子、孝を問ふ。子曰く、違ふとなかれと。樊遲御す、子之に告げて曰く、孟孫、孝を我に問ふ。我れ對へて曰く、違ふとなかれと。樊遲曰く、何の謂ひぞや。子曰く、生には之に事ふるに禮を以てし、死して之を葬むるに禮を以て

し、之を祭るに禮を以てすと(爲政)その違ふとなかれとは、父命に違はされの意、生死祭るに禮を以てすと、父命を以て能く禮を事とせよとの義也。是れ聽從を第二義とせるものにあらずや。又論語に子曰く、父母在せば、遠遊せず、遊ぶに必ず方ありと(里仁)遊ぶに方ありとは、父命を受くると能はざるを畏れて也。是れ又服従の孝の主要なる意義なるを知るべし。

孝の第三義は養志也。蓋し養志とは、管に肉體的孝養を謂ふのみならず、父母の志を養ひ、該て又繼志をも謂ふもの也。論語に曰く、子夏、孝を問ふ。子曰く、色難し、事あり、弟子其の勞に服す。酒食あり、先生饌す(すなは)是を以てのみ、孝と爲さんやと(爲政)是れ父母の顔色に承順して、その志を養ふべきを謂ふ。又論語に子曰く、父在せば其の志を觀、父没せば其の行を觀、三年父の道を改むるとなきを孝と謂ふべしと(學而)最後の一句は復た里仁篇にも出づ。父没して其の行の善なるを見て之を繼述する洵に至孝と謂ふべし。

敬愛、聽從、養志の三者は、孝の主要なる意義にして、孝の所謂正道也。然れども、父母皆完人にあらず、從つて時に或は失なき能はず、是れ微諫の變に對する孝



の四義を爲すものならずんばならず。論語に子曰く、父母に事へて幾かすかに諫む。志の従はれざるを見、又敬して違はず、勞して怨まずと。里仁、その敬愛の情、聽從の勞、養志の心を失はず、徐に父母を微諫せんとするもの、是れ亦孝の一要素にあらずや。

聖人

孔子の仁者とは知仁勇の三徳を該ね備はれるものにして、更に博施濟衆の大功を成せるものを聖人とは謂ふ也。論語に子曰く、聖と仁との若きは吾れ豈に敢てせんやと。述而以て孔子が仁者と聖人とを區別せしを見るべし。論語に又子貢曰く、如し博く民に施し、能く衆を濟ふとあらば何如仁と謂ふべきか。子曰く、何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。堯舜も其れ猶ほ諸を病めりと。雍也蓋し仁者は必ずしも聖人にあらず。然れども聖人は必ずや仁者ならざるべからず。而して其の分る所は、一に博施濟衆の功業の如何に在り、かくて此の大功を爲すや、一に又知に依らざるべからず。是れ孔子が知仁を特に重んじたる所以也。畢竟聖と聖たらざるとは、全く知の深淺に由つて分るゝものと謂ふべし。

君子

孟子曰く、規矩は方員の至也。聖人は人倫の至也と。離婁然り。孔子が所謂聖人とは理想的完全圓滿の人格也。故に曰く、聖人は吾れ得て見るべからず。君子を見るを得ば斯に可なりと。述而此の如く、聖人は到底尋常人の企及する所にあらず。是れ孔子が此の嘆ありし所以なるか。

然らば孔子の君子とは如何なるものなりや。意ふに君子の意に二あり。一は位を以て云ひ、一は徳を以て云ふ。而して論語に於ける君子は、多く徳を以て云ふを常とす。論語に子曰く、君子義を以て質と爲し、禮以て之を行ひ、孫以て之を出し、信以て之を成す。君子なる哉と。衛靈公是に由つて之を觀るに、孔子の君子には、少くとも三箇の修養ある人物を謂へるものに似たり。曰く、道德的修養、審美的修養、宗教的修養是れ也。而して知的修養の缺くべからざるは、今更ら言ふを要せざれば、爰には之を説かず。

君子に於ける道德的修養は最も重要なもの也。論語に子曰く、君子諸を己に求め、小人諸を人に求むと。衛靈公その之を己に求むるとは、道德的修養の謂



ひ也。而して道德的修養の第一著歩として、は義を質とするに在り。論語に子曰く、君子の天下に於けるや、適もなく、莫もなき也。義之比ふと。里仁又曰く、君子は義に喩り、小人は利に喩ると。里仁以て君子の義を以て質とする、その修養の根柢を見るべし。

君子既に義を根柢となす、焉ぞ實行を重んぜざらんや。論語に子曰く、君子食飽を求むるとなく、居安を求むるとなし。事に敏にして言に慎み、有道に就いて焉を正す、學を好むと謂ふべきのみと。學而又論語に子曰く、君子事を易うして説を難しとす。之を説くに道を以てせざれば説かざる也。其の人を使ふに及んでや、之を器とす。小事を難しとして説を易しとす。之を説くに道を以てせずと雖も説く也。其の人を使ふに及んでや、備を求むと。子路以て空言を避けて、その實行を重んぜざるを見るべし。

君子は義を以て質とし、行を重んじて身謙遜なりと雖も、亦大に自重する所なかるべからず。論語に子曰く、君子重からざれば威あらずと。學而又曰く、君子矜にして争はず、群にして黨せずと。衛靈公是れ共に其の大に自重する所ある

謂へる也。既に自重する所あり、その俯仰の際、豈に毅然たるものなからんや。論語に曰く、司馬牛、君子を問ふ、子曰く、君子は憂へず、懼れず、曰く、憂へず、懼れず、斯ち君子と謂ふか。子曰く、内省みて、疚しからず、夫れ、何をか憂へ、何をか懼れんやと。顔淵是に至つて、君子が道德的修養成れりと謂ふべきか。

君子の第二の修養は、美的趣味にあり。論語に子曰く、質文に勝てば野、文質に勝てば史、文質彬彬として、然る後に君子なりと。雍也蓋し質とは義にして、徳行の謂ひ、文とは禮樂にして、美的趣味あるの謂ひ也。以て徳行禮樂の二者該ね備はらざれば、君子たると能はざるを見るべし。君子既に美的趣味あり、その性焉ぞ和平ならざるを得んや。論語に子曰く、君子和して同せず、小人同して和せずと。子路又曰く、君子泰にして驕らず、小人驕にして泰ならずと。子路其の安泰にして和平なる性情、是れ豈に美的修養より來れるものにあらずや。

君子の第三の修養は、宗教的知命にあり。論語に孔子曰く、君子三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る、小人天命を知らずして畏れざる也。大人に狎れ、聖人の言を侮ると。季氏、君子が此の天命を畏れて、敬虔の情あるは、蓋し君



子の始めあり終ある所以也。又論語に子曰く命を知らざれば以て君子と爲すとなき也。堯曰實に知命は君子が修養の有終の美を就すものと謂ふべし。既に君子は天を知り命に安んず。その性情焉を從容自適ならざるを得ざらんや。論語に子曰く君子は坦蕩々たり。小人は長戚々たりと。述而又曰く人知らずして慍らず亦君子ならずやと。學而是れ豈に天を怨みず人を尤めざる宗教的修養の極致にあらずや。

之を要するに、孔子の所謂君子人とは、知的修養あると同時に道德的、審美的、宗教的の三修養あるもの、謂ひなるは以上の如し。然るに古來の學者、德行禮樂の二方面に於いてのみ之を説き、未だ宗教的方面に説き及ばざるは、孔子の所謂君子なるものを見るに未精なりと謂ふべきか。

### 一八 孔子の政事

#### 徳治

孔子の道とは政教の原理の謂ひ也。之を内面的に考ふれば仁となり、之を外面的に考ふれば禮となる。而して禮なるものは政治的原理にして、孔子之を以て治國の要道としたるや論なし。論語に子曰く上禮を好めば民使ひ易き也と。(憲問)然れども禮の基礎とする所を尋ねれば仁に歸着せざるを得ず。是れ孔子が徳を以て先づ國を治めんとしたる所以也。論語に子曰く政を爲すに徳を以てす。譬へば北辰の其の所に居て衆星之に共ふが如しと。爲政又曰く之を道くに政を以てし之を齊ふるに刑を以てせば民免れて恥なし之を道くに徳を以てし之を齊ふるに禮を以てせば恥ち且つ格ありと。爲政又曰く季康子政を孔子に問うて曰く如し無道を殺して有道に就かば何如と。孔子曰く子政を爲すに焉ぞ殺を用ゐん。子善を欲せば民善とす。君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之に風を上ふれば必ず偃すと。顔淵是れ俱に徳を以て先としたるもの



にあらざや、  
 凡そ徳を以て國を治めんとするものは、己先づ之を行はざるべからず。實行はげに徳治の根本也。論語に子曰く、其の身を正うせば、令せずして行はる。其の身正しからざれば、令すと雖も従はずと。子路又曰く、苟も其の身を正うせば、政に從ふに於いて何か有らんや。其の身を正うする能はざれば、人を正すとを如何と。子路又論語に季康子政を問ふ。孔子曰く、政は正也。子帥ゆるに正を以てせば、孰れか敢て正ならざらんやと。顔淵又論語に曰く、季康子盜を患へ、孔子に問ふ。孔子對へて曰く、苟も子が之を欲せざれば、之を賞すと雖も竊まずと。顔淵是れ皆爲政治家なるもの、躬行を先きにせざるべからざるを謂へるもの也。

教化

孔子の政治の主義は、徳を以て民を教化するに在り。是れ孔子の教へずして民を虐するを惡める所以也。論語に子曰く、教へざる民を以て戰ふ。是れ之を棄つると謂ふと。子路又曰く、子張政に從ふべきを問ふ。子曰く、五美を尊び、四惡を屏げば、政に從ふべし。子張曰く、何をか五美と謂ふ。子曰く、君子は惠にして費な

らず、勞すれども怨みず、欲すれども貪らず、泰なれども驕ならず、威あれども猛ならず。子張曰く、何をか惠にして費ならずと謂ふ。子曰く、民の利する所に因つて之を利す。斯れ亦惠にして費ならずにあらざや。勞すべきを擇んで之を勞す、又誰をか怨まん。仁を欲して仁を得、又焉ぞ貪らん。君子は衆寡となく、小大となく、敢て慢するとなし。斯れ亦泰にして驕らざるにあらざや。君子は其の衣冠を正うして、其の瞻視を尊び、儼然として人望んで之を畏る。斯れ亦威にして猛ならず。にあらざや。子張曰く、何をか四惡と謂ふ。子曰く、教へずして殺す之を虐と謂ふ。戒めずして成を視る之を暴と謂ふ。令を慢にして期を致ひ、之を賊と謂ふ。猶しく之を人に與へ、出納に吝なる之を有司と謂ふと。堯曰、その四惡とは主として教へざるを惡める也。是に由つて之を観るに、孔子の政治は徳政教化と云ふべく、民を教育するは、其の最も重んずる所也と謂ふべし。論語に又曰く、子衛に適く、冉有僕たり。子曰く、庶いなる哉。冉有曰く、既に庶し、又何をか加へん。曰く、之を富ますさん。曰く、既に富む、又何をか加へん。曰く、之を教へんと。子路又以て之を教育教化するとの忽にせざるを見るべし。



衣、食、足りて、禮節を知るは、管に管子の政なるのみならず、也。論語に曰く、食を足らし、兵を足らせば、民之を信ずと、顔淵以て食を足らし、民を富ますは政治の第一著手なるを見るべし。之を要するに、之を教ふるに、禮を以てし、之を養ふに、食を以てす。是れ孔子が徳治教化の大綱と謂ふべし。

### 一九 孔子の教育

孔子多年教育に従事し、門人の其の門に出入するもの、凡そ三千人の多きに至れり。されば其の教育の主義方法に於いて大に見るべきものあらむ。蓋し孔子は上知と下愚と移らずと、陽貨謂へるも、他の方面に於いては亦、教あれば類なしと、衛靈公謂へるを以て見れば、教育の功果の多大なるを認めたるが如し。果然孔子は全力を教育事業に捧げて、志を後世に展ばさんとせし也。

#### 啓發主義

孔子が教育の第一の特長とも稱すべきものは、その啓發主義なるに在り。論語に子曰く、憤せざれば啓せず、悱せざれば發せず。一隅を擧げ、三隅を以て反さうせざれば復ざる也と、述而以て孔子が自發的憤悱の精神を以て誘掖薰陶せんとしたりしを見るべし。此の點より見れば、孔子の啓發主義は大にソクラテイスの産婆術に類せりと謂ふべし。殊にソクラテイスの慣用せし反問法の如きは、亦孔子の屢用ひし所也。論語に曰く、子張、士を問ひ、何如か、斯に之を達と謂



ふべきか。子曰く、何ぞや。爾が所謂達とは。子張曰く、邦に在りても聞え、家に在りても必ず聞ゆと。子曰く、是れ聞也。達に非ざる也。夫れ達とは質直くして義を好み、言を察して色を觀、慮以て人に下り、邦に在つても必ず達し、家に在つても必ず達す。夫れ聞とは色、仁を取つて、行違ひ、之に居て疑はず。邦に在りても必ず聞え、家に在つても必ず聞ゆと。顏淵、是れ、豈にソク、ラ、テ、スが用ひし、反問の法にあらずや。

意ふに啓發主義を實地に用ひんとせば、勢、反問法に據らざるべからず。蓋し啓發せんと欲せば、先づ人の有する所の知識の度を知らざるべからざれば也。是れ孔子が反問を設けて衆善を採擇せし所以のものならんか。論語に子曰く、三人行へば必ず我が師あり。其の善者を擇んで之に従ひ、其の不善にして之を改むと。述而又曰く、蓋し知らずして之を作すものあらん、我れは是れなき也。多く聞き、其の善者を擇んで之に従ひ、多く見て之を識るす。是れ知るの次也と。述而、黙々として之を聞き、然る後に徐々として之を採擇せし狀を見るべし。又論語に子曰く、吾れ知るとあらんや。鄙夫あり、我に問ふ、空々如たり。我れ其の兩端

を叩いて焉を竭くすと。子罕以て如何に孔子が不知不識の際に、徐々に反問の法を設け、之を啓發せんとしたりしかを見るべし。

孔子が啓發主義を執り、反問の法を用ひ、衆善を採擇したりしは此の如し。然るに論語に子曰く、二三子、我を以て隠せりと爲すか。吾れ爾に隠すとなし。吾が行として、二三子に與みせざるものなきは、是れ丘也と。述而あり、是れ孔子が餘りに啓發主義に走りて、その注入主義を缺けるが爲めにあらずや。

#### 特性教育

孔子の教育の特長の第二は、その特性教育を施したるに在り。論語に曰く、子貢に謂つて曰く、女と回と孰れか愈れりや。對へて曰く、賜や、何ぞ敢て回を望まん、回や一を聞いて十を知り、賜や一を聞いて二を知ると。子曰く、如かざる也。吾は女が如かざるに與みすと。公冶長、是れ回と賜との其の特性を知れるものにあらずや。又論語に曰く、子貢問ふ、師と商と孰れか賢れる。子曰く、師や過ぎ、商や及ばずと。曰く、然らば師は愈れるか。子曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しと。先進、是れ又孔子が子張と子夏との特性を熟知せるものにあらずや。是に於



いてか孔子は其の特性に應じて、其の特種の教を爲しぬ。論語に曰く、子路問ふ、  
 聞くがまゝに斯すち諸しよれを行はんか。子曰く、父兄のあるあり、之を如何して、其れ  
 聞くがまゝに之を行はん。冉有問ふ、聞くがまゝに諸しよれを行はんか。子曰く、聞くが  
 まゝに之を行へ。公西華曰く、由や問ふ、聞くがまゝに斯すち諸しよれを行はんか。子曰  
 く、父兄の在るありと、求や問ふ、聞くがまゝに斯すち諸しよれを行はんかと。子曰く、聞  
 くがまゝに之を行へと、赤や惑ひひぬ、敢て問ふと。子曰く、求や退たい故こに之を進しんむ。由  
 や人を兼ぬ故こに之を退たいくと、先進せん是れ、豈に純乎たる特性の教育にあらずや。  
 孔子、門生の學藝に懈惰なるものあるを見て、之を詰責するや、殆ど嚴として、  
 秋霜烈日の如きものあり、その冉求を詰責せるが如き、宰我を誅責せしが若き  
 是れ也。門人參照然れども、學藝に勤め、才徳の見るべきものあるや、之を稱する  
 と亦甚だ至れるものあり、その顔淵を賛し、子路を稱し、將た仲弓、閔子、冉牛、冉求、  
 子貢等の才學徳行を稱せしを見て、之を知るべし。門人參照而して、其の師弟の  
 關係に至つては、曾に七十子の孔子に服すると、孟子の謂ひしが如きのみなら  
 ず、孔子の門生を愛するとの深きものありし也。門人參照されば、子の如き門生

を批評するや、場合によりては、殆ど露骨に過ぐるが如きものあり。論語に曰く、  
 柴や愚、參や魯、師や辟、由や喭と、先進せん又以て孔子が能く門生の特性を知悉して、  
 此の如く深刻なる批評を下せるを見るべし。



## 二〇 孔子の文藝

孔子が如何に詩歌を以て門生に勧めたりしかは、吾人既に之を詩と書とに於いて叙せり。詩と書と参照又その文藝に對する嗜好の如何をも瞥見せり。樂と審美的感情参照されば茲には單に辭章に就いてのみ、孔子が感想の一斑を窺はんと欲す。

論語に子曰く、命を爲くるや、裨諶之を草創し、世叙之を討論し、行人子羽之を修飾し、東里の子産之を潤色すと、憲問是に由つて之を觀れば、孔子の辭章に對するや、實用と修辭との二者該ね備はらざるべからざるを認めたるは明か也。然れども辭章の要は畢竟達意と實用とにあるのみ、故に論語に孔子曰く、辭は達のみと、衛靈公是れ辭章の本義を道破せるものにあらずや、蓋し辭章の要は達意にあり、實用に在り、修辭は洵に之に亞ぐべきものなれば也。然れども孔子は達意のみを取りて、敢て修辭を排したるにあらず、否潤色修飾の要を認めたるは、鄭人の辭章に於いて之を認むるとを得べし。されば孔子が辭章に對し

ては、達意修辭の二方面に必ず相須つべきものなるを説ける者と謂ふべきか。

以上章を重ねると二十。未だ孔子の教學と德行との全豹を竭くさずと雖も、恐らくは其の一斑を窺ふに於いては庶幾からんか。若しそれ孔子の全容を視ふに於ては、決して此の小冊子の能く盡くし得べき所にあらず。然りと雖も、其の要を尋ね、其の歸を求むれば、教學に於いては仁、德行に於いては人格の二者に歸著せずんばあらず。此の點に於いては、吾人聊か力を竭したるものあるを信ず。

孔子の歿後、其の學徳大に光輝を發し、漢の高祖、淮南より還る時、魯を過ぎ、大牢を以て孔子を祠る。之を支那皇帝が孔子を祠るの始めとなす。是れより代々の帝王之が釋奠を行ふもの多し。其の稱號の如きも、漢の平帝は諡して應聖宣尼公と謂ひ、唐の玄宗は諡して文宣王と云ひ、元の成宗は諡して大成至聖文宣王と謂ふ。我が國に於いても、文武天皇、西暦紀元七百〇一年、釋奠を行ひてより、世々之を行ひたるは、夙に人の知る所、而して各代之を歸敬せし所以のものは、



一〇に其の仁の發現たる人格の崇高にして博大なるに歸せずんばあらず於戯  
孔子の人格も亦絶大なる哉

孔子終

明治四十一年十二月十日印刷  
明治四十一年十二月十六日發行

孔子  
定價金八拾錢

著者 西脇玉峯

發行者 山縣文夫  
東京府下北豐島郡東葛飾町  
大字上駒込十九番地

印刷者 青木弘  
同市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場  
同市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

不許複製

發行所

東京巢鴨郵便區上駒込山縣邸内  
電話(長距離加入)下谷四百三十八番  
振替貯金口座三百五十五番

内外出版協會







博士バンクス原著 内外出版協會譯述	わが青年	定價金參拾錢 郵稅四錢	本田増次郎譯述	婦人の修養	定價金五拾錢 郵稅八錢
ウオスターマン原著 文學士村上池洲譯述	社會の要する少年	定價金參拾五錢 郵稅四錢	落合浪雄譯述	婦女小訓	定價金拾錢 郵稅不
ロイズヴェルト原著 文學士鎌田繁吉譯述	ロイズヴェルト集	定價金四拾錢 郵稅四錢	加藤眠柳編著	女子立志編	定價金六拾錢 郵稅四錢
若宮卯之助譯	英和對照 座右銘	定價金四拾錢 郵稅四錢	内外出版協會譯述	人生問題叢書	定價金九拾錢 郵稅八錢
內村鑑三編	英和對照 偉人と讀書	定價金拾五錢 郵稅二錢	二。成功書類		
文學士 中村勝山譯	日常生活の標準	定價金貳拾錢 郵稅二錢	博士マ、デン原著 文學士 竹村修譯述	實業に就かんと青年	定價金壹圓 郵稅小拾八錢
中里介山編著	克己制慾の實例	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	文學士 コップ原著 文學士 竹村修譯述	商業の模範的經營	定價金六拾錢 郵稅六錢
水島靜處譯編	日常生活の勇士	定價金參拾五錢 郵稅四錢	博士マ、デン原著 内外出版協會譯述	成功の基礎	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
スタンフ大學總長原著 若宮卯之助譯述	廿世紀の青年告	定價金參拾錢 郵稅四錢	博士マ、デン原著 内外出版協會譯述	眞正の成功者	定價金五拾錢 郵稅六錢
内外出版協會譯述	歐米の新思潮	定價金四拾錢 郵稅六錢	博士マ、デン原著 文學士 竹村修譯述	成功論	定價金壹圓 郵稅小拾八錢
ストロング原著 文學士皆川正禎譯述	時勢と青年	定價金四拾錢 郵稅四錢	博士マ、デン原著 内外出版協會譯述	成功論	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
占部百太郎著	青年の修養	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	文學士 アルダーソン原著 文學士 藤原元吉譯述	成功の福音	定價金參拾錢 郵稅四錢
宮崎右夫著	貧の朋友	定價金拾五錢 郵稅二錢	文學士 マスターオプアーツ 松岡正男譯述	失敗の成功	定價金貳拾錢 郵稅二錢
ヒューヤー原著 文學士若月保洋譯述	立志の動機	定價金五拾錢 郵稅六錢	三。傳記書類		
好本督譯述	教育上の常識	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	ヘレン・ケラー原著 文學士皆川正禎譯述	わが生涯	定價金五拾錢 郵稅六錢

四。偉人言行録

チヨ、ト原著 山縣佛三郎譯述	リンコンの人物 及ぶ其事	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	渡邊修二郎編著	山鹿素行言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
松村 巖著	岩崎彌太郎	定價金參拾五錢 郵稅不	中里介山編著	中江藤樹言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
新公論社編纂	現代名流自傳	定價金參拾錢 郵稅四錢	秋山悟庵編著	貝原益軒言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
渡邊修二郎編著	佐倉義民木内惣五郎實錄	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	松本越編著	ルイテル言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
阪井久其岐著	明治崎人傳	定價金貳拾五錢 郵稅不	渡邊修二郎編著	大石良雄言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
松村 巖著	近藤勇	定價金貳拾五錢 郵稅不	秋山悟庵編著	聖德太子言行録	定價金貳拾五錢 郵稅四錢
四。偉人研究	言行録		五十嵐越郎編著	吉田松陰言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
中里介山編著	第一 リンコン言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二郎編著	渡邊華山言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
中里介山編著	第二 トルストイ言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢	本田無外編著	熊澤蕃山言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
中里介山編著	第三 ガーフィールド言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢	渡邊修二郎編著	新井白石言行録	定價金四拾錢 郵稅四錢
中里介山編著	第四 フランクリン言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢	文學士藤吉喜一編著	ナポレオン言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
中里介山編著	第五 クラッドストーン言行録	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	松本越編著	ネルソン言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
中里介山編著	第六 二宮尊徳言行録	定價金貳拾五錢 郵稅四錢	室田有編著	ウエリントン言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
加藤信正編著	第七 ロイズヴェルト言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢	大屋徳城編著	目蓮上人言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢
百島操編著	第八 ワシントン言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢	田中豊松編著	ベスタロッチ言行録	定價金參拾錢 郵稅四錢



百島操編著	第廿四編	ゴッルドン言行錄	定價金參拾錢	廣瀬勸次郎編著	第廿九編	ガリバルヂ言行錄	定價金參拾錢
姉齒準平編著	第廿五編	リウイングストン言行錄	定價金參拾錢	松本越編著	第廿四編	マホメット言行錄	定價金參拾錢
楓不二夫編著	第廿六編	伊藤仁齋言行錄	定價金貳拾五錢	丸島敬編著	第一編	本居宣長言行錄	定價金參拾錢
本田無外編著	第廿七編	道元禪師言行錄	定價金參拾錢	秋山悟庵編著	第二編	上杉鷹山言行錄	定價金參拾錢
河面仙四郎編著	第廿八編	クロムウエル言行錄	定價金參拾錢	杉原三省編著	第三編	高野長英言行錄	定價金貳拾五錢
四島玉峯編著	第廿九編	諸葛孔明言行錄	定價金參拾錢	勝水瓊泉編著	第四編	大鹽平八郎言行錄	定價金參拾錢
松原至文編著	第三編	親鸞聖人言行錄	定價金貳拾五錢	大屋徳城編著	第五編	傳教大師言行錄	定價金參拾錢
大屋徳城編著	第一編	弘法大師言行錄	定價金參拾錢	田中豐松編著	第六編	シーザー言行錄	定價金參拾錢
渡邊修二郎編著	第二編	徳川光圀言行錄	定價金參拾錢	佐久間原編著	第七編	シェイクスピア言行錄	定價金參拾錢
廣瀬勸次郎編著	第三編	フレイベル言行錄	定價金參拾錢	渡邊芳雄編著	第八編	ラスキン言行錄	定價金參拾錢
秋山悟庵編著	第四編	林子平言行錄	定價金參拾錢	武安衛編著	第九編	孟子言行錄	定價金參拾錢
村田犀川編著	第五編	佐久間象山言行錄	定價金參拾錢	吉川潤二郎編著	第十編	ビスマルク言行錄	定價金參拾錢
北島竹之助編著	第六編	司馬溫公言行錄	定價金貳拾五錢	丸島敬編著	第一編	半田篤胤言行錄	定價金參拾錢
本田無外編著	第七編	法然上人言行錄	定價金參拾錢	田中豐松編著	第二編	エヂソン言行錄	定價金參拾錢
松原至文編著	第八編	西郷隆盛言行錄	定價金貳拾五錢	本田無外編著	第三編	白河樂翁言行錄	定價金參拾錢

五. 家庭書類 附婦女及少年少女書類

シエルドン原著 文學士吉川秀雄譯述	家庭に於ける職分	定價金五拾錢	稲田薄光編著	日本女鑑	定價金四拾錢
界 枯川著	家庭の新風味	定價金壹圓	千河岸櫻所著	日本武士氣質	定價金四拾五錢
界 枯川著	家庭夜話	定價金壹圓	羽仁もと子著	家庭小話	定價金四拾五錢
文學士 竹村修譯述	家庭講話	定價金五拾錢	文學士 皆川正禱譯述	如何にして生活すべき乎	定價金五拾錢
テ・ヴィス原著 内外出版協會譯述	理想の母	定價金貳拾五錢	羽仁もと子編	如何に家計を整理すべき乎	定價金四拾五錢
マンテガツア原著 文學士皆川正禱譯述	良人の選定	定價金參拾五錢	羽仁もと子著	家庭教育の實驗	定價金參拾五錢
スウエル女史原著 本田増次郎譯述	黒馬物語	定價金五拾錢	醫學博士加藤照磨譯述	育兒法	定價金六拾錢
ウイガ原著 日高柿軒譯述	フランダーズの犬	定價金貳拾五錢	羽仁もと子著	育兒の栞	定價金拾五錢
羽仁もと子案 家庭之友	家計簿	定價金四拾錢	醫學士ウオーカー原著 醫學士田村貞策譯述	衛生美容術	定價金五拾錢
羽仁もと子案 家庭之友	主婦日記	定價金參拾五錢	伊國カクヲ著	西洋獨占ひ	定價金貳拾五錢
内外出版協會案	反省日録	定價金四拾錢	篠田鐵造著	幕末百話	定價金四拾錢
文學士皆川正禱譯述	母の道	定價金貳拾錢	宮崎三味編	はなしの仙郷	定價金貳拾錢
加藤眠柳譯述	英國士道物語	定價金參拾五錢	波多野鳥峰譯	愛の力	定價金貳拾錢
西洞たみの譯編 偉人に及ぼせる	婦人の感化	定價金六拾錢	少年園編纂	いと	定價金四拾錢



朝夷孤舟編	ちゑのくら	定價金貳拾五錢	寒川鼠骨著	歲事記例句選	定價金五拾錢
桑田常藏譯	儉約のすゝめ	定價金貳拾錢	佐藤紅綠著	俳句小史	定價金參拾錢
成澤金兵衛編	家庭遊戲全書	定價金參拾錢	山田三子編	蕪村俳句全集	定價金貳拾五錢
大藏大臣認許	國旗合せ	定價金貳拾錢	大塚甲山編	一茶俳句全集	定價金貳拾五錢
内外出版協會考案	家族合せ	定價金貳拾錢	熊谷無漏編	天明俳句集	定價金貳拾五錢
内外出版協會考案	室內ベースボール	定價金貳拾錢	河俣雪峰編	名家句集	定價金貳拾五錢
百島冷泉譯編	天路歷程	定價金貳拾錢	大塚甲山編	明治新俳句集	定價金貳拾五錢
百島冷泉譯編	奴隸トム	定價金貳拾錢	渡邊水巴編	新俳句選	定價金貳拾錢
百島冷泉譯編	聖書物語	定價金貳拾錢	高柴象外編	俳句語彙	定價金貳拾錢
百島冷泉譯編	赤靴物語	定價金貳拾錢	大塚甲山編	芭蕉俳句全集	定價金貳拾五錢
百島冷泉譯編	二人巡禮	定價金貳拾錢	熊谷無漏編	許六俳句集	定價金貳拾錢
百島冷泉譯編	漂流記	定價金貳拾錢	大塚甲山編	元祿十家俳句集	定價金貳拾五錢
百島冷泉譯編	イソップ物語	定價金貳拾錢	永井孤秋編	女流俳家句集	定價金貳拾五錢
高濱虛子著	俳句入門	定價金貳拾五錢	佐藤紅綠編	滑稽俳句集	定價金貳拾五錢
			文學士 沼波瓊音編	俳諧奇調集	定價金貳拾五錢

六。俳諧書類 附川柳狂歌書類

沼波瓊音共編	古今名流俳句談	定價金參拾錢	高等師範學校教授	英文詳解	定價金參拾錢
天生目杜南	俳句選	定價金貳拾四錢	本田増次郎註釋	獨逸語獨案内	定價金五拾錢
大塚甲山編	川柳類纂	定價金貳拾五錢	渡邊修二郎著	JAPAN, 1853-1864	定價金五拾錢
花岡百樹編	新柳樽	定價金貳拾錢	トサトウ英譯	開國史談	定價金五拾錢
藤波樂齋編	類題狂歌大全	定價金參拾錢	渡邊修二郎校補	HISTORY OF JAPAN	定價金五拾錢
藤波樂齋編	英語の手紙	定價金貳拾四錢	トサトウ英譯	(英文日本近世史略)	定價金四錢
高橋太華編	英語獨案内	定價金四拾錢	若松賤子譯	英雄論詳解	定價金貳拾五錢
	英語和書翰文例	定價金參拾四錢	文學士 小野竹三	英米名家詩抄	定價金六拾錢
	英語作文便覽	定價金五拾錢	文學士 小原要逸	希臘勇士譚	定價金參拾錢
	實用英語會話	定價金參拾錢	文學士 小原要逸	文學書類	定價金六拾錢
	英語自修論	定價金貳拾五錢	文學士 小原要逸	附作詩作文書類	定價金六拾錢
	英文學研究	定價金壹圓	文學士 小原要逸	ワグネル物語	定價金六拾錢
			文學士 小原要逸	その前夜	定價金七拾錢
			文學士 小原要逸	血の涙	定價金參拾錢
			文學士 小原要逸	短篇集	定價金五拾錢
			文學士 小原要逸	トルストイ短篇集	定價金參拾錢

七。語學書類

八。文學書類 附作詩作文書類



宮崎 三味編著 **中學文範** 定價金五拾錢 郵稅四錢

寒川 鼠骨編著 **寫生文** 定價金四拾錢 郵稅四錢

寒川 鼠骨編著 **日記文** 定價金四拾錢 郵稅四錢

塀 枯川著 **普通文** 定價金貳拾五錢 郵稅二錢

山田 美妙著 **文例** 定價金五拾錢 郵稅四錢

五十嵐 越郎編 **女子文範** 定價金參拾五錢 郵稅四錢

少年園編纂 **詩學捷徑** 定價金貳拾錢 郵稅不要

**九。中等教科書類** (文部省檢定濟)

文學士 佐々政一編 **日本文學史要** 定價金五拾錢 郵稅六錢

第三高等學校教授 文學士 林森太郎編 **國語讀本** 定價金五拾錢 郵稅八錢

卷一(品切) 定價金貳拾錢 郵稅四錢  
卷二 定價金貳拾錢 郵稅四錢  
卷三 定價金貳拾五錢 郵稅四錢  
卷四 定價金貳拾五錢 郵稅四錢

簡野 道明編 **初等漢文讀本** 定價金八拾錢 郵稅八錢

文學士 勇原六著 **簡易西洋史** 定價金七拾錢 郵稅八錢

第一高等學校教授 文學士 杉敏介著 **日本小語典** 定價金參拾錢 郵稅四錢

**一〇。雜書**

ホルドキン原著 文學士 生田弘治譯 **讀書の趣味** 定價金八拾錢 郵稅八錢

若宮 卯之助譯 **東洋文明論** 定價金四拾錢 郵稅四錢

內外出版協會編纂 **袖珍百科全書** 定價金壹圓 郵稅小八錢

工學士 後藤一郎著 **寫真術全書** 定價金五拾錢 郵稅六錢

松居 松葉著 **自轉車全書** 定價金參拾錢 郵稅四錢

渡邊 修二郎著 **演劇大全** 定價金六拾錢 郵稅六錢

渡邊 修二郎著 **各國分類年表** 定價金八拾錢 郵稅六錢

大下 藤次郎著 **水彩畫階梯** 定價金參拾錢 郵稅四錢

渡邊 修二郎著 **百科節用** 定價金貳拾錢 郵稅二錢

陸軍步兵中尉功四級 工學士 市川紀元二著 **應用骨相學** 定價金參拾錢 郵稅四錢

北澤 寅之助合著 **渡米案内** 定價金參拾錢 郵稅四錢

成澤 金兵衛著 **全國學校案内** 定價金五拾錢 郵稅六錢

內外出版協會編纂 **就業自活案内** 定價金參拾錢 郵稅四錢

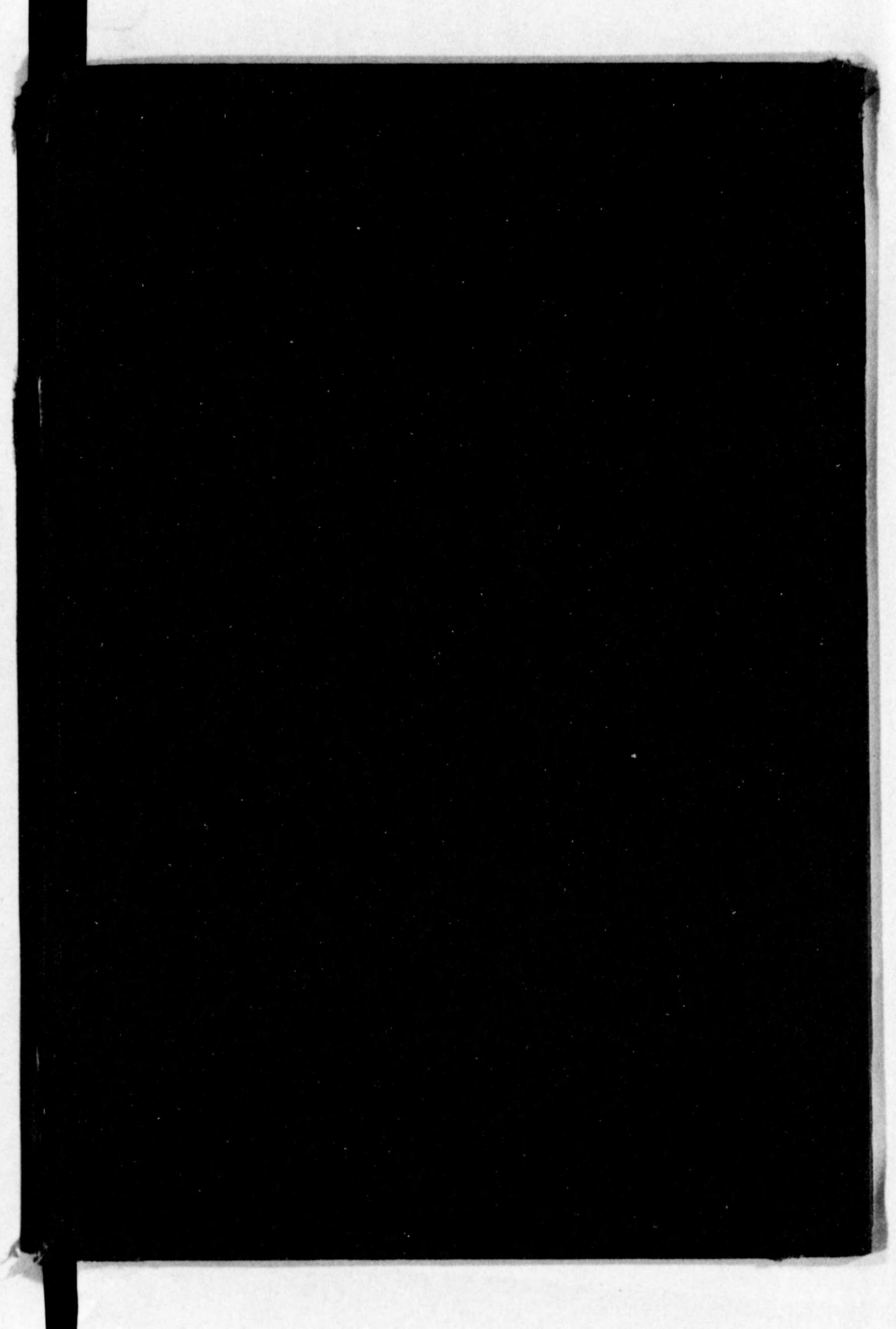
內外出版協會編纂 **女子の新職業** 定價金參拾錢 郵稅四錢



64  
38

2







64  
38

008217-000-2

64-38

孔子

西脇 玉峯/編

M41

AAC-0091





